

# 和洋教育

(2022年度版)



2023年4月  
和洋国府台女子中学校  
和洋国府台女子高等学校

巻頭言

学校長 宮崎 康

＝研究・調査・活動報告＝

- 1 新型コロナウイルス感染症を通して何を考えるか  
—高等学校第2学年授業実践報告— (社会科) 池田 寛斗 …………… 1
- 2 国際的志向性を高める外国語教育とは —中学第2学年授業報告—  
(外国語科) 柴田 奏 …………… 5
- 3 英語コミュニケーションⅠ 授業実践報告 (外国語科) 栃木 壮佐 …………… 9
- 4 和洋独自の探究授業 WIQ ～プログラムデザインへの挑戦～  
(探究科) 大窪 拓矢、大竹 瞳、小高 涼、高橋美絵子、土田 尚樹、  
中澤 美紀、丹羽 祥、村上 喜恵…………… 13

■題字：学校法人 和洋学園元理事長 田村 謙 治



和洋教育 Vol.30 (2022年度版)

発行年月：令和5年4月1日

発行責任者：校長 宮崎 康

和洋国府台女子中学校・高等学校

〒272-8533 千葉県市川市国府台2-3-1

TEL 047-371-1120

## 巻 頭 言

学校長 宮崎 康

和洋学園は創立125年を超えて、女子教育を実践してきました。そして和洋国府台女子中学校高等学校も新制の学校制度の中で創立し、70年を超えて未来に向かって歩んでいます。創立者堀越千代の「実践教育」、中興の祖稗方弘毅の「和魂洋才」を受け継ぎ、現在は「凜として生きる」女性の育成を実践しています。さらに新学習指導要領で「主体的、対話的、深い学び」が提唱され、今までにない教育が求められています。

このような状況の中で、新たな教育の実践は必須です。しかし実践をしているだけでは、井の中の蛙と変わりありません。実践とともに、その報告であり実践を基にした論考が必要です。自分の考えや実践を文字にすることは、大変な創作活動です。そして文字にすれば、当然人からの批判が予想されます。本当に生徒のために教育をしているのであれば、この創作活動と批判はとても重要です。実践だけならば、いくらでも逃げ場があります。その逃げ場をなくして自らを突き詰める姿勢は、必ず生徒にも大きな影響を及ぼします。

しかし最も感じることは、最終原稿を提出した瞬間に後悔することです。後悔と言っても「出さなければ良かった」ではなく、「ああいうことを書けば良かった」という思いです。つまり原稿を書くことで、自分の考えはさらに先に向かっていくのです。この醍醐味を是非皆様に味わって欲しいのです。

和洋国府台女子の教員が今、何を考えて何をしているのかを知って下さい。そして、批判をして下さい。批判された筆者は、さらに考えや実践によって対話を広げて下さい。



# 新型コロナウイルス感染症を通して何を考えるか

## — 高等学校第2学年授業実践報告 —

和洋国府台女子中学校・高等学校

社会科 池田 寛斗

### 0. はじめに

2020年以来猛威をふるう新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）により、我々の生活は変化を余儀なくされた。中国の武漢市ではいち早く大規模なロックダウン（都市封鎖）が行われ、活動制限による感染症の抑え込みは多くの国で行われた。これほど同時期的にかつ大規模に活動制限が行われたのは人類史上初めてのことである。しかし、それでも収束には至っておらず、人類と新型コロナの闘争は未だ続いている。

教育現場では、マスクをつけ人との距離を保ちながらの生活が当たり前となり、我が校もオンライン授業の実施やアクリル板を用いた「黙食」などの対応を迫られた。

一方で、教育現場では「感染症ブーム」となり、特に今年度から新設された「歴史総合」においては、感染症との関連を議論する授業実践が多々報告されている<sup>1</sup>。

「歴史総合」の学習指導要領には、大項目「D グローバル化と私たち」にて感染症に関して次のような言及がある。

…冷戦と国際関係、人と資本の移動、高度情報通信、食料と人口、資源・エネルギーと地球環境、感染症、多様な人々の共存などに関する資料を活用し、課題を追究したり解決したりする活動を通して、(中略) 資料から情報を読み取ったりまとめたりする技能を身に付けること、(中略) グローバル化に伴う生活や社会の変容について考察し、問いを表現すること…(ができるよう指導する。)

…

学習指導要領においては、感染症をグローバル化

に伴う社会の変化に即し理解し考察する能力が求められている。その点で、感染が全世界的であったこと、各国がほぼ同時期的にロックダウンを行ったことなど、グローバル化が進展する現代社会特有の感染症といえる新型コロナは、「歴史総合」を扱う上で、非常に適した題材であると考えられる。

ただ、歴史の連続性に重きを置きすぎるあまり、歴史上の感染症と新型コロナの共通点ばかりを強調することにはさほど意味がないと思われる。社会背景が変われば、感染症の形態も変化する。今、生徒たちに必要なのは、現代社会の状況を踏まえたうえで、歴史上の感染症から学ぶことを選択する能力ではないだろうか。

本稿では、高等学校第2学年和洋コースの生徒33名を対象に行った「日本史B」の授業実践報告を行う。本授業では、「コロナ後の世界を考えよう」と題し、歴史上の感染症との共通点・相違点を探ることを通して、コロナ前後の社会のあり方の変化を思案することを目的とした。

なお本授業の実施にあたり、貴重な授業時間を割いてくださった工藤香奈教諭に感謝の意を表したい。

### 1. 新型コロナと過去の感染症の共通点と相違点

まず、新型コロナにより現代社会が大きく変化したことを意識づけるために、「新型コロナウイルスの影響で変わったことは何か?」という問いに関して班で話し合ってもらった。「マスク生活になった」「消毒の回数が増えた」「昔より人混みを拒否するようになった」「リモート授業や学校生活の制限」など、生徒たちの生活に身近な変化についての回答が多くを占めた。また「いじめが減った」「人との距離が遠くなった」など、他者との関係性に関して興味深い回答も得られた。その一方で「海外旅行に

行けなくなった」「海外からの旅行者が減った」など海外とのつながりを意識した回答も散見した。

新型コロナが生活を大きく変えたことを意識づけたいうえで、より歴史的な視野で感染症を考察するため、「感染症が世界史を大きく変えたメインファクターである」とする「疫病史観」の説明を行った。特に歴史学者のW・H・マクニールによる論を紹介し<sup>2)</sup>、感染症による人口減少が世界史に大きな影響を与えたことを説明した。

その上で、①天平7～9年(735～737)にかけて日本で流行した天然痘、②中世ヨーロッパにて流行したペスト菌、③「コロンブスの交換」によるアメリカ大陸の感染症などの事例を取り上げ、それらの感染症と新型コロナの共通点・相違点を挙げ、事前に配付したワークシートに記入する、という課題を設定した。共通点のみならず相違点を挙げさせるのは、歴史の連続性に考慮しつつも、すべてが同じ流れではないことを理解させ、現代の状況を踏まえたうえで歴史から学ぶことを選択する必要があることを意識づけるためである。

①の事例では、藤原四子の死去により橘諸兄に政権が移ったこと、時の政権は大赦や大仏造立事業をはじめとする神仏への祈祷行為によって対応したこと、食器を使いまわさない工夫がなされていた可能性があること<sup>3)</sup>などを示した。さらに近年の研究で明らかにされている、古代日本において感染症に対しては接触の忌避が有効であると考えられていたこと<sup>4)</sup>を説明し、医療が確立されていない時代においても、現代でも有効な予防策がとられていたことを示した。

②の事例では、死者数の増加により農民の地位が向上したことや百年戦争との関連を説明した後、ボッカチオ『デカメロン』、シェイクスピア『ロミオとジュリエット』にみられる感染者の隔離について紹介し、さらにはユダヤ人差別<sup>5)</sup>や魔女裁判との関連を説明した。このことから、新型コロナ流行初期に、感染者への差別や都会から地方に帰省する人々に対する差別があったこととの共通点を想起させる狙いがあった。

③の事例の紹介は、よりグローバルな視点から感染症を理解してもらい狙いによるものである。「コロンブスの交換」により、インフルエンザや天然痘

などに対する免疫をもたないアメリカ大陸の感染者の多くが死に至ったことを説明した。この時期に大気中の二酸化炭素濃度が低下したことを示すグラフを提示し<sup>6)</sup>、「コロンブスの交換」が及ぼした影響力の強さを説明した。この事例から、中国で発生した新型コロナが全世界的に流行したことと関連し、グローバル化した社会の負の側面に気付かせる狙いがあった。

上記①～③の事例と新型コロナの共通点としては「人と人との接触により感染する」「差別感情が高まった」「人の移動による感染が多い」など、概ね予想通りの回答が多かった。一方、相違点としては「皮膚に異常がみられないこと」「見た目では判断できないこと」「医療技術の進歩によりワクチンが早く普及したこと」「収束しないこと」など多様な意見がみられた。

## 2. 根絶された天然痘—国際協力の重要性—

続いて、過去の感染症と新型コロナの相違点として挙げられた、「収束しないこと」に注目した。本授業を行った2022年11月30日は、未だ「第8波」と呼ばれる感染拡大期にあった。そのため、新型コロナを「収束しないもの」と考えている生徒も多かったと考えられる。

その上で、「自然界から根絶した感染症は何種類あるか?」という課題を設定し、選択肢〈(1)1000種類、(2)100種類、(3)10種類、(4)1種類、(5)ない〉を与えたうえで、班で話し合ってもらった。実際に自然界から根絶できた感染症は唯一天然痘のみであるため、答えは〈(4)1種類〉であるが、生徒たちの予想では〈(2)100種類〉が最も多く、1種類しかないことに驚いている生徒も多かった。

その上で、「世界中の人々とともに感染症も移動を続けるこの時代に、どのようにして天然痘を根絶することができたのだろうか?」という問いを設定し、班で話し合ってもらった。

「あらゆる国の協力があつたのではないか」という意見を取り上げ、天然痘の根絶は、国際協力により実現したことを説明した。WHO(世界保健機関)が「世界天然痘根絶計画」を可決した1958年から、「世界根絶宣言」を出した1980年までの間に、ワクチンの接種率を上げるだけでなく、継続的な感染の監視

と分析を世界規模で行う上で、多くの国々が相互的に協力している。グローバル化は感染症の加速度的な流行を生む反面、グローバル化に伴って整備された国際協力体制は、人類史上初めて感染症を根絶することに成功した。この事実から、「一層グローバル化が進んでいく現代社会において、国際協力の重要性を示すとともに、新型コロナの収束への希望を示すのではないかと説明した。

### 3. 感染症を通して何を考えるか

新型コロナ流行により、外出自粛が呼びかけられたことで、他者とのコミュニケーションの機会は減少した。本校においても、マスク着用や「黙食」を推奨していることから、友人の素顔を知らない、というケースも珍しくない。コミュニケーション機会の減少は、他者との関係性にも変化をもたらしている。

注目すべきは、2021年にニッセイ基礎研究所が全国の20～74歳の男女を対象に行った調査である<sup>7)</sup>。「コミュニケーション機会の減少による孤独や孤立への不安を感じているか」という質問に対し「非常に不安」「不安」と答えた20歳代は30.5%であった。他者との自由な活動を制限せしめた新型コロナは、現代社会における他者との関係構築の難しさ、という課題を表出させた。

学生生活のほぼ半分を新型コロナとともに生活した高校第2学年の生徒においても、コミュニケーション機会の減少は身近な問題であろう。先述のように、新型コロナによって変わった点として「いじめが減った」「人との距離が遠くなった」といった意見が挙がった点からも、他者との関係性の変化に対して敏感な様子がかがえる。そこで、他者との関係性の変化を探る題材として「マスク」を取り上げた。

「なぜ人々はマスクをするのか？」という問いを設定し、班で話し合ってもらった。多くの班で「感染症を防ぐため」という答えが散見したが、「家ではマスクを外すのはなぜ？」という問いを追加すると、「家族は信用しているが、家の外では誰が感染しているかわからず、怖いから。」という答えがみられた。

その上で、『信用スコア』を紹介した。『信用スコ

ア』とは中国で実施されている社会信用システムであり、社会的ステータスに関する政府のデータをもとに個人の信用度を数値化し、全国民をランキング化するものである。『信用スコア』が高ければあらゆるサービスや取引の安全性を担保でき、様々な優遇を受けられる一方で、ランク差による格差の拡大も大きな問題として考えられている。さらに中国政府による国民の監視システム、という側面もあり、『信用スコア』に対して少なからず嫌悪感を示す生徒が多かった。しかし「他者との関係性が希薄になり、他者を信用できなくなりつつあるコロナ禍の現代社会では、このようなシステムが普及する可能性もある」と説明すると複数の生徒は腑に落ちた表情を見せた。最後に、「現代社会における新型コロナの流行を通して、他者との関係を今一度考え直す機会としてほしい」とまとめ、授業を終えた。

### 4. 課題とフィードバック

本授業を通して得た課題を述べたい。

第一に、本授業では歴史上の感染症と新型コロナの共通点・相違点を理解することを通して、新型コロナ前後の社会の変化に気づくことを目的とした。しかし実際には他者との関係性に対する問題提起に留まり、生徒たちによる自発的な課題の発見を引き出すに至らなかった。より深い議論のためには、新型コロナ前の社会にて当たり前だった事例の議論を行い、「当たり前だったことが当たり前ではなくなったこと」を強調する必要があるのではないかと考える。

第二に、過去の感染症の事例紹介に時間を割いてしまい、共通点・相違点を生徒同士で話し合う時間を十分に取れなかった。扱う事例を絞り、より議論に集中する時間をとることも考えられた。

第三に、本来の目的とは離れるが、感染症と差別に関して、議論を深めることも考えられた。歴史上、感染症と差別意識は不可分な関係である。例えば、日本古代においては「病者」は家を追い出され、活動場所を路上に追いやられている<sup>8)</sup>。中世以降「非人」として差別を受ける存在の原初的形態はおそらくこういった「病者」であると考えられ<sup>9)</sup>、感染症患者に対する差別意識の土壌は古代から醸成されていたと考えられる。また、中世以降には「ハンセン病(ら

い病)」患者への差別があり、現在でも大きな問題となっている。さらに中世ヨーロッパでは、先述のように、ペストの流行をユダヤ人のしわざと考える人々により、ユダヤ人の虐殺が行われた事例なども多く存在する。

新型コロナ流行初期に、感染者への差別のみならず、都会から地方への帰省者に対する差別の事例があったことは先述の通りであるが、欧米諸国ではアジア人に対する差別が行われていた事例も多く存在した。感染症の流行に伴う差別意識の高まりは、現代社会の大きな課題であろう。本授業では深く扱うことはかなわなかったが、歴史上の感染症や新型コロナを題材とし、「感染症と差別」について議論する授業を展開してみたい。

本授業では事前にワークシートを配り、それを回収することで授業へのフィードバックとした。ワークシート上に「授業を通して感じたこと」という項目を設けたので、生徒たちの回答を一部紹介したい。

- ・歴史上の感染症と新型コロナには多くの共通点、相違点があることがわかった
- ・根絶できた感染症があることに驚いた
- ・感染症には悪い側面も勿論あるが、私たちが学ぶこともあると感じられた
- ・人と人がつながることで解決できることも、コロナによって妨げられているので、新しい人間とのつながりを築くことが大切だと感じた

他

〈参考文献・資料〉

- 1 歴史教育者協議会 編『歴史地理教育』No.919、2021年1月など。本授業は、飯島渉「『歴史総合』と感染症―「感染症を通じて」歴史を読み解く」、小川涼作「コレラ流行と産業革命からアフター・コロナの社会を考える」(『同』)を参考にした。
- 2 ウィリアム・H・マクニール『疫病と世界史』(佐々木昭夫訳 新潮社、1985年)
- 3 神野恵「平城京の疫病対策－医療・まじない・祈り－」(『奈良の都の暮らしぶり～平城京の生活誌～』奈良文化財研究所、2020年)
- 4 今津勝紀「脚夫・乞食・死穢」(『日本古代の輸送と道路』八木書店、2019年)、本庄総子「日本古代の疫病とマクニールモデル」(『史林』103-1、2020年)など
- 5 村上陽一郎『ペスト大流行』(岩波新書、1983年)
- 6 Pongratz, Caldeira, K., Reick, C. H., & Claussen, M. (2011). Coupled climate?carbon simulations indicate minor global effects of wars and epidemics on atmospheric CO2 between ad 800 and 1850. *The Holocene*, 21(5)
- 7 ニッセイ基礎研究所。“2020・2021年度特別調査 第7回 新型コロナによる暮らしの変化に関する調査”. 2022-1.  
<https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=69926?site=nli> (参照2023-2-11)
- 8 『類聚三代格』巻19、弘仁4年(812)6月1日官符
- 9 黒田俊男「中世の身分制と卑賤観念」(『黒田俊男著作集』6、法蔵館、1995年、初出1972年)



# 国際的志向性を高める外国語教育とは

## — 中学第2学年授業報告 —

和洋国府台女子中学校・高等学校

外国語科 柴田 奏

### 1. はじめに

国境や現実空間という枠組みを越え、様々なバックグラウンドを持った人々と相互に繋がることが容易になりつつある現代、他者と関わり合うスキルは今を生きる生徒が育むべき能力である。外国語教育は言語の知識を与える科目に止まらず、言語をツールとしてコミュニケーションを行う力を育成することがより強調されている。

中学校英語の学習指導要領では「外国語科の目標及び内容」に関して次のように言及している。

(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

(3)は、外国語科における「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関わる目標として掲げたものである。「文化に対する理解」やコミュニケーションの相手となる「聞き手、読み手、話し手、書き手」に対して「配慮」しながら、「主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を身に付けることを目標としている。

上記のように、学習指導要領において、コミュニケーションをとる相手に対する姿勢や文化的理解、自らが発信する内容の深さを養うことが求められている。ただ、日本のように英語を外国語として学ぶ環境では、日本語以外を第一言語に持つ人々との関わりが少なく、英語でコミュニケーションを取る特定の相手を想像することが難しい。英語を学ぶことが日常生活において急務と感ぜない生徒にとって、学ぶ意義を見出すことは困難だろう。一方で、同様

の環境下であっても、高いモチベーションを持ち、熱心に英語の学習をする生徒もいる。そのような生徒が英語を学ぶ動機として意識的・無意識的に漠然とした国際社会のイメージを持つ態度が要因であると八島(2001)は言及し、この態度のことを「国際的志向性」とした。この国際的志向性は学習意欲と正の相関があり、積極的に英語でコミュニケーションをとる意思も強い傾向にあるとした(八島,2002)。以上のことから、授業において異文化理解の機会を積極的に持ち、英語でのコミュニケーションの場を増やすことが重要だと言える。

本稿では、ラウンドシステムを活用した授業の全体像を紹介した後、中学校第2学年B組の生徒27名を対象に行った授業実践報告を行う。

### 2. 和洋ラウンドシステムを通じた授業のねらいと取り組み

本校の取り組みとして、中学校の英語の授業では「和洋ラウンドシステム」を行っている。中学で培うべき英語の知識を身につけ、自らの言葉で表現できる生徒を育成することを目標としている。ラウンドシステムとは、何度も異なる目的を持って教科書の音読を繰り返し行い、段階的に文字情報と音声情報の処理を手助けすることを目的としている(金谷他,2017)。

本年度からはユニットごとにラウンドを行った。1、2学期では1)リスニング、2)音に焦点を当てた音読活動、3)言語に焦点を当てた指導、4)意味に焦点を当てた音読活動、以上の4ラウンドを行った。3学期ではラウンド5とし、既習の内容をリテリングを通してアウトプットを行った。

音読では、発音、単語レベルの意味、文章レベルの意味を捉えるために目的を変えながら音読を行

う。暗示的に意味の把握ができた後、明示的な文法の説明をする。その後、意味に再度フォーカスを置き、シャドーイングや付属のアニメーションのフレコなどを行った。

3学期では自分の言葉で説明するリテリング活動を行った。リテリングとはその物語を全く知らない人に対しても理解できるように英語でストーリーを再構築する活動だ。生徒は既習の本文内容を踏まえ、相手に伝えるという目標を持って活動を行う。リテリングは教科書を丸暗記してそのままアウトプットするリプロダクションとは異なり、自分で考えて知っている言葉を活用して言い換える必要がある。そのため、生徒は1、2学期で学んだストーリーや語彙をさらに深めつつ、自分の言葉にするとという視点を新たに持って授業に参加した。活動に先立ち、意味にフォーカスをして音読を行い、ディクテーション、ディクトグロスの活動を行った。その後、簡単に口頭でリテリングを行い、その言葉を書く活動を最終的に行った。

また、音読の他に毎回の授業の15分程度はさまざまなウォーミングアップを行った。習った文法を活用し、ペアで質問を合おう活動や英作文をした。また、中学第2学年では、リーディングの活動として、リーディングマラソンを行った。リーディングマラソンとは、200～300字程度の文章を継続的に読む活動だ。本文に関連する内容を中心に取り扱い、本文への知識を別角度から深められるよう行った。

### 2-1 教材観・単元観

*Here We Go! Course 2* (光村出版) を教材として扱う。本教材はラウンドシステムでの活用を目的とした検定教科書だ。本授業では、Unit 6 Work Experienceを教材として扱った。このUnitは3つのストーリーで構成されている。Part 1では、中学生のKotaが職業体験のために小学校へ赴き、ネパールの児童とともに凧を作る図画工作の授業に参加する。Part 2では、体験したことをKotaはスピーチでクラスメイトへ伝える。Part 3ではそのスピーチに対して大変だったことや学んだことをクラスメイトや教師が質問を行う。この教材を通し、ネパールという異文化に触れつつ、異文化交流の場において英語で会話する必然性を教材として持たせている。ま

た、文法事項としては不定詞の副詞的用法、接続詞becauseを取り扱う。

Unit6は1、2学期は8時間、3学期は2時間を充当し、本報告書ではユニットに入る導入とリーディング活動、リテリング活動について述べる。

### 2-2 生徒観

対象の生徒は中学1年次からラウンドシステムによる授業を受けており、音読やペアワークに慣れている。生徒同士での関わりを大切に授業を行っており、ペアワークでは英語を話す心理的不安が低く、自ら進んでコミュニケーションを取ろうとする意欲も高い。一方で、中学2年生は、自らが表現できる文法や語彙の幅と表現したいこととの乖離があるため、学習意欲を保つことが難しいように見受けられた。そのため、言語に焦点を置きすぎず、教材への興味関心を高める必要性が高いと感じた。

## 3. 取り組み

### 3-1 本文への興味関心を引き出す活動

ネパールという遠い国に関して興味を持ち、日本で生活する登場人物と生徒をつなげることを目的に導入を行った。本文で必要な語彙のインプットと異文化理解の意欲を向上させることを主として英語でインプットを行った。授業者が今まで行ったことのある日本以外の国を紹介し、留学やボランティア、ワーキングホリデーなどを活用して日本以外で活動する方法があることを伝えた。身近な教員が世界とどこかに繋がっているのかモデルとして示し、近い将来どこか別の国へ行くことをイメージさせるためだ。その後、“Which country do you want to go in the future?”という発問を行った。英語を学びたいのでアメリカへ行きたいという生徒や、韓国文化が好きなので韓国へ行きたいという生徒がおり、将来日本以外を訪れてみたいという生徒が多く見受けられた。もちろん、日本で生活し続けたいという生徒もいた。その意見から、日本においてはどのように異文化交流の機会があるのかという発問につながった。旅行で日本へ来る人々だけではなく、実際に日本に住む人々に関して話しをした。授業者が日本の公立小学校で日本以外のバックグラウンドを持つ児童の言語や勉強のサポートを行った経験を話した。

日本においてもさまざまな国の人が生活しており、互いに理解するにはどのようにコミュニケーションをとるべきかという話しをした。

導入後、教科書のストーリーを聞き、教員が簡単な質問を問いかけて内容理解を進めた。リスニングの際は視覚的に意味がわかるように、教科書のイラストレーションを活用し、さらにネパールの位置をGoogle Earthで確認した。また、本文でヒンドゥー教のお祭りであるダシャインフェスティバルに関して触れられており、画像を交えながら授業を行った。

次の授業ではネパールやダシャインフェスティバルに関して理解を深めるため、リーディングマラソンを行った。ネパール人の友人にダシャインフェスティバルに関してインタビューを行い、インターネットではわからない彼自身の体験を教えてもらった。それを生徒にわかる英語に変えリーディング活動を行い、ダシャインフェスティバルに関して生徒も教員も理解を深めることができた。活動後、「ネパールの文化に興味深いと思った」や「ネパール人の友達がいることに驚いた」という生徒の意見があり、他国の文化に目を向けるだけではなく、別の文化を持った人と繋がる意識を高めることができたのではないかと感じた。

### 3-2 本ユニットにおける課題と3学期の取り組み

本ユニットでの文法事項に関して、特にbecauseの用法を身につけることが課題となった。becauseは日本語では「なぜなら、」とすることに影響され、「because」と間違える生徒が多く、口頭でもよく副詞節のみで使われていることから、接続詞として正確に使えるまで時間を要した。1月の自宅学習日間にGoogle formsを活用した英作文の課題に行ったが、同様に間違える生徒が多く散見された。しかし、Unit6の課題であったbecauseの用法は、リテリングで何度も書くことにより生徒も使いながら学んでおり、生徒は徐々に身につけることができていた。

実際にリテリングを行うと、自分で言葉を紡ぐことは言語的に難易度が上がるため、間違えることへの恐怖や失敗することへの不安が高まり、生徒が自発的に話したいと思う気持ちが低くなりやすいくことがわかった。そのため、アウトプットを強要しすぎず、なるべくハードルを下げて活動を行った。いざ

スピーキングを行うと、今までなんとなく理解していた内容ではアウトプットできないと生徒自身が必要に迫られて教科書を読み、今までの活動を振り返りはじめ、表現に必要な語彙や文法を自ら学ぶ姿が見受けられた。

### 4. 指導の結果

2023年1月に該当クラスにアンケートを行い、27名中19名の回答を得た。学習意欲とリテリングへの意識調査を目的としてアンケートを行った。英語が科目として得意と答えた生徒は全体の15%に対して、英語を学習するモチベーションが普通よりも高いを選んだ生徒は全体の62%いた。また、その理由として「将来のためと思ってやっている」「英語の(歌の)歌詞がわかるようになる」「いつか自分の力で海外の本や歌に触れてみたい」「動画を見るときに日本語字幕がなくても英語字幕でわかるようになりたい」という意見があった。これらの意見から1、2学期の授業を通して一部ではあるものの国際的志向性が授業を通して高まっているのではないかと推測する。また、今後身につけたい英語の力として「話す力(即興)」と「語彙力」を選択した生徒が多く、コミュニケーションをとることを念頭に授業に参加し、自らが発信することへの意欲が高まっているのではないかと考える。

また、英語を教室で話す不安感に関して、ペアワークで話すことが多く、不安感が減ったという意見や自信が持てるようになってきたという意見があった。教師対生徒、生徒対生徒でコミュニケーションをとる時間を持っているため、スピーキングに対する抵抗感や不安感が少ない生徒を育成できていると実感している。

### 5. 課題点と今後に向けて

生徒のアンケートを通し、ラウンドシステムを活用した授業の課題を3点挙げる。

第一に、生徒自身が教材を通し深く考え、自分の意見を発表する場を持つ時間が少なかったことだ。ラウンドシステムでは音読のトレーニングに時間がかかり、必然的に自分自身で教材について考える機会が少なくなってしまう。今回の授業実践においても、導入等で知識として異文化について話ができ

が、実際に生徒が異文化理解に関して深く思考する時間が取れなかったことは課題点だと感じている。アンケートからも英語自体が嫌い、興味がないという意見もあり、今後はより英語の授業の内容的にもより深く生徒が興味関心を持てるように改善していかなくはないと考えている。

第二に、今年度行ったラウンドシステムでは1、2学期にインプットを行ってもアウトプットまで時間があきすぎるため、ユニットの内容によっては効率の悪いものになってしまったのではないかと危惧している。来年度に向けてリテリングのタイミングを吟味する必要があるのではと感じる。

第三に、既習の表現を自由に活用できるまで身につけることができなかつたことだ。特に、アンケートにおいて生徒が語彙力を伸ばしていきたいと答えた通り、教科書本文で扱われる単語をすべて自由に使える域には達していない。それ故、同じ内容を繰り返すだけではなく、同じ単語と別の形で出会う機会を増やす必要があるのではないかと考える。そのため、多読やICT機器を活用し、楽しみながら語彙力が向上できるような取り組みを新たにしていきたいと感じる。

ラウンドシステムの言語を習得するためのトレーニングを通し、生徒が言語を学び、実際にコミュニケーションで活用する力を伸ばすサポートを拡充していきたい。言語を学ぶだけではなく、言語を使って世界や自分自身への認識を深める授業を展開していきたい。

#### 参考文献

- 金谷憲 監修, 西村秀之, 梶ヶ谷 朋恵, 阿部 卓, 山本 丁友他. (2017)「英語運用力が伸びる 5 ラウンドシステムの英語授業」『大修館書店』.
- 八島智子(2001). 「[国際的志向性]と英語モチベーション —異文化コミュニケーションの観点から」『関西大学外国語教育研究／関西大学外国語教育研究機構 編』第1号 33-47.
- Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*, 86, 54-66
- 文部科学省(2017). 中学学習指導要領 外国語偏 14-16.  
[https://www.mext.go.jp/content/20210531-mxt\\_kyoiku01100002608\\_010.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210531-mxt_kyoiku01100002608_010.pdf)

# 英語コミュニケーションⅠ 授業実践報告

和洋国府台女子中学校・高等学校

外国語科 栃木 壮佐

## 1. はじめに

高校1年生和洋コース・進学コースの英語コミュニケーションⅠにおいて、Heartening English CommunicationⅠ（桐原書店）Lesson7“Behind the Price Tag”を扱った際、本文の内容理解を深め、このLessonで扱われている社会問題について自分の意見を述べられるよう、段階を踏んだ複数の学習活動を取り入れた。本稿では、今年度の授業で行った3つの活動を紹介する。

## 2. Lesson7の文章構成

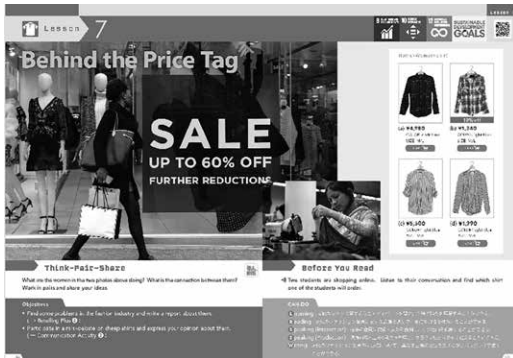


図1 Lesson7表紙

本教科書では、各Lessonは以下のように構成されている。

- ① Think-Pair-Share
- ② Before You Read
- ③ 本文Part 1
- ④ 本文Part 2
- ⑤ 本文Part 3
- ⑥ 本文Part 4
- ⑦ Whole Text View
- ⑧ Retelling Plus

## ⑨ Communication Activity

## ⑩ Grammar

## ⑪ Real Life Information

Lesson7の本文はファッション業界に関する講演があり、それに対して2人の人物が自身の意見を述べるという設定である。以下、各Partの要点と本Lessonに設定されたCommunication Activityについて説明する。

### (1) Part 1

バングラデシュで製造された14カナダドルのポロシャツを買うと想定し、そのうちのいくらがバングラデシュの縫製工場に働く労働者の手に渡るのかを解説する。本文によると、現地の工場労働者の給料は1か月あたり5,000円程度であり、この額は高校生が日本で1日アルバイトをして稼ぐことのできる額よりも少ないと説明する。

### (2) Part 2

こうした工場労働者の労働環境を説明する。夏場には高温多湿な環境での長時間労働があり、時には事故が起こる。こうした事故の一例として、2013年にバングラデシュの首都ダッカで起こったラナ・プラザ崩落事故を挙げている。

安価なファストファッション衣料の背後には、バングラデシュ人労働者の過酷な状況があり、このような事実を知っても、安価な衣料品を買いたいと思うかという問いを投げかけて、講演を締めくくっている。

### (3) Part 3

この講演を聞いたある男性が、自分の意見を述べ

る。自分はバングラデシュで製造された衣料品を購入するとし、その根拠として値段の安さ、こうした服が自分に似合うということ、現地の人々の生活支援につながることの3つを挙げている。

(4) Part 4

別の人物が逆の立場から意見を述べる。自分はこうした衣料品を買いたいとは思わないとし、その理由として品質の悪さ、耐久性のなさ、こうした製品を買うことが搾取をなくすことにはつながらないということの3つを挙げている。

なお、これら2つの意見文は、実用英語技能検定や大学入試で見られるArguing Essayの形式を踏まえていることが明らかである。

(5) Communication Activity

この教科書ではCommunication Activityとして2つの活動が設定されている。まず、本文の話題に関連したモノログや対話、インタビューなどを聴き、設問に答えるListening活動、次に聴いた内容や本文で読んだ内容を参考にしたアウトプット活動である。後者の活動は、インタビューやディスカッション、プレゼンテーションなどのSpeaking活動や記事を書く、ウェブサイトに投稿するなどのWriting活動など、Lessonによって様々である。

Lesson 7では前者の活動として、“We should stop buying cheap shirts.”というトピックに関するミニディバートを聴くもの、後者の活動として同じトピックについて自分の意見（賛否）とその理由を考えるものが設定されている。さらに、ペアワークにおいて、相手の意見を聞いて要約し、その意見に賛成する理由や反対する理由を述べることになっている。

こうしたLesson構成を踏まえ、今回は与えられた“We should stop buying cheap shirts.”というトピックについて自分の意見を表明し、他人の意見について賛否を述べるができることを目標のひとつに設定した。そして、筆者が担当するクラスでは、これを達成できるよう、この目標から逆算して、段階的な学習活動を3つ設定した。

3. Poster Carousel

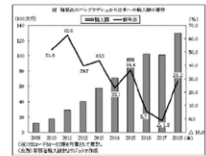
Part 1とPart 2は意見を述べるべきトピックの背景事情を説明するパートである。そのため、生徒はこの2つのパートについて理解を深める必要がある。また、本文で述べられている内容が、自分たちとは関係のない遠く離れた世界での出来事という捉え方ではなく、自分たちの生活にも密接に関連しているという認識を持つことが、積極的な意見表明の原動力となる。まず、本文に入る前にファストファッション衣料品の実物を見せ、「なぜこれらの衣料品は比較的安価なのか」という質問を投げかけた。生徒は衣料品のタグを見て、原産国がベトナムやカンボジア、バングラデシュであることを「発見」し、このことが製品価格に影響しているのではという仮説を抱いた。その後、本文に登場するバングラデシュに絞って紹介し、日本への衣料品輸出が増加傾向にあることを説明した。

[ Think-Pair-Share ]

Made in Bangladesh



Capital: Dhaka  
Population: 165,158,616



Increase in clothing exports to Japan  
Sewing industry is one of the key industries of Bangladesh.

図2 授業で使用したスライドの一部

Part 1とPart 2の本文を扱った後、その内容の深い理解のため、ポスターカーセルという活動を設定した。これは本文の内容について各自A3の用紙1枚を使ってポスターを作り、ペアを何度も変えながら繰り返しそのポスターについて説明をする活動である。



図3 生徒が作成したポスター

作成したポスターはVisual Aidとして機能する。自分でVisual Aidを作成するメリットはいくつかあり、まずポスターを作るため、何度も本文にアクセスすることである。そして、「自分が理解した」内容を表現できることである。この教科書では、Retelling PlusにもVisual Aidが用意されているが、これはあくまでも「用意された」ものであり、必ずしも生徒自身の理解と重なるわけではない。自分でポスターに表現することで、自分にとって教科書に載っているものよりも使い勝手が良いVisual Aidが出来上がる。さらに、何度も繰り返し説明する中で、本文への理解を深めることができる。生徒への指示は「Part 1 とPart 2 の内容を自分なりに相手に説明すること」ではなく、「自分の作ったポスターについて相手に説明すること」である。こうすることによって、生徒は前者のように言われたときよりも心理的ハードルが下がった状態で活動に取り組むことができている様子であった。

#### 4. Spider Web Discussion

Part 4 まで本文を扱い、Communication Activity のListening活動まで終了した後、“We should stop buying cheap shirts.” というトピックについて、自分の意見を表現する活動を行うことを予告する。その際、各自の意見を深めるために、スパイダー討論という活動を設定した。前任校の地歴や公民の授業で行われているのを目にし、今回の目標達成のための手立てとして応用できると考え、採用した。実施にあたっては國貞 2022を参考にした。手順は以下の通りである。

- (1) 全体を6～8人で構成されるグループに分け、各グループ1人の記録者を選出する。
- (2) 与えられたトピックについて、討論をする。記録者は討論には参加せず、外側から討論を観察する。このとき、記録者は発言者を順に線で結んでいき、各自の発言内容に応じて決められた印を記入する。
- (3) 15分の討論の後、記録者は自分の記録したSpider Memoをグループのメンバーに示し、定められたループリックに基づいて、自分たちのグループの評価を決める。

記号とループリックについては、國貞 2022のものをそのまま採用した。

コード	内容
☆	・皆が納得する、説得力のある発言
Q	・物事の核心をつく質問
D	・客観的なデータや事実の引用
C	・討論を促すための話題転換
B	・議論のバランスを調整
×	・他人への否定、自分の押し付け等

図4 今回採用したコード表

項目	内容
① 聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・誰かが他人の話を敬意を払って聞くことができた。</li> <li>・誰かが他人の話から成長のチャンスをつかみとろうとする姿勢を見せることができた。</li> </ul>
② 深い思考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・誰かが思い付きをそのまま口に出さずに、自分の発言内容について周りがどう受け止めるかを考えてから発言することができた。</li> <li>・誰かが自分が当初抱いていた考え・感覚が、議論を通して変化していく・していかないことに気づくことができた。</li> </ul>
③ チャレンジ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・誰かが意見を述べる権利があることを認める雰囲気であった。</li> <li>・誰かが他人の意見を強く否定されたり、無視されたりすることがなかった。</li> </ul>
④ 意外性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲間の報告を聞いて、自分にとって特に「へえ～」となった事柄を共有する。</li> <li>・「こんなことを知れた」「このような視点があったなんて…」といった驚きを共有するとGood!!</li> </ul>
⑤ 広がり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの英語コミュニケーションIでの学習を振り返り、どのような点で世界の抱える問題への理解が深まったのかを共有する。</li> </ul>

図5 今回採用したループリック

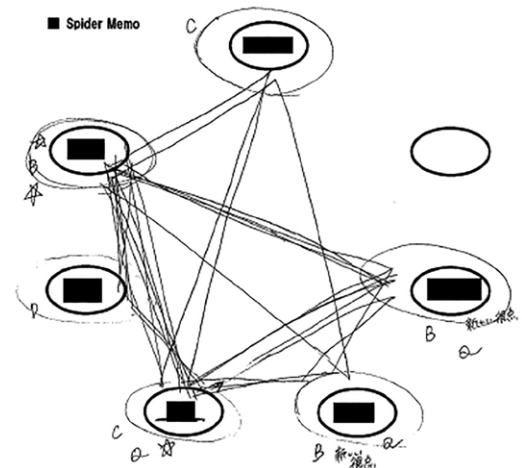


図6 Spider Memo

発言者を結ぶ線は、誰がどのくらい発言したかなどの討論の流れを「見える」化したものである。これを設けることによって、生徒たちは積極的に討論に参加しようとし、自らトピックについての考えを深めている様子だった。また、今回の活動は日本語をメインに行った。それは、目的が与えられたトピックへの理解を深めることであり、これを言語的障壁が阻害しないようにするためである。

## 5. Silent Dialogue

スパイダー討論までで考えを深め、与えられたトピックについて、自分の意見を表明する段階まで辿り着いた。今回は、紙上対話という活動を設定した。手順は以下の通りである。

- (1) 意見表明や反論、妥当性の判断など、今回の活動に必要な表現やそれらを使った文章サンプルを示す。
- (2) Opinionの項目に記名し、I agree / disagree with the idea because …の形で意見を書く。
- (3) 意見を書いたら、出席番号が自分の1つ後の生徒に用紙を手渡す。受け取った生徒はOpinionに書かれた意見を読んで、それを踏まえてAttackの項目にYou said …, but I disagree with you because …の形で反論を書く。
- (4) 反論を書いたら、出席番号がさらに1つ後の生徒に用紙を手渡す。受け取った生徒はOpinionとAttackに書かれた意見を読んで、どちらの意見が妥当か判断する。その根拠について、Judgeの項目にI think …'s opinion is more reasonable because …の形で書く。

今回紙上対話の形式を採用したのは、生徒が即興での議論にまだ慣れていないからである。即興でのミニ討論を実現するためには、相当な時間数を仕込みにあてなければならない。今回はそのために割ける授業時間数が限られていたので、文字情報を見ながらじっくりと自分の意見を考えることのできる形式を採用した。また、今回の目標は「“We should stop buying cheap shirts.”というトピックについて自分の意見を表明し、他人の意見について賛否を述べるができること」であり、それを言語的障壁が阻害しないよう、DeepLに限って翻訳サイトを使用しても良いことにした。授業では、生徒は相手の書いた内容について疑問があるときは、積極的に相手のところまで移動して質問をするなどしていた。また、どうしても反論などが思いつかない生徒には、筆者との「軽い雑談」的対話を通して、考えを深めていけるよう手助けをした。

## 6. まとめ

ICTの活用やペーパーレスが叫ばれる昨今であるが、今回紹介した3つの活動はワークシートを使った、ある意味では「アナログな」活動である。しかし、今回の活動においてはICTを使うよりむしろ紙を使う方が効果的であった。それはイラストを使った活動やその場の議論を記録する活動などにおいては紙の方に利があるからである。また、筆者は公立学校と私立学校の人事交流で本校に赴任しており、来年度には公立学校に戻る身である。本校は1人1台端末が浸透しており、ICTを使った授業が実践しやすい環境だが、千葉県は都道府県と市町村を合わせてBYODによる1人1台端末の環境整備が最下位レベルである。そのような環境の中では、ICTに完全に依存した授業は構築しにくく、ある程度はアナログな手法を取らざるを得ない。

今回の活動を通して、生徒は自ら視覚的イメージを作ることによって、本文の理解を深めることができた。さらに、内容について自分の考えをまとめたり、他人の意見に触れたりすることで、生徒にとって英語を使う活動がより有意義なものとなる。

## 7. 参考文献

高3 社会 あなたの知らない世界の諸地域 現代世界の諸地域【授業案】

(<https://onl.tw/XUzVmLM> 最終閲覧日2022年12月21日)



# 和洋独自の探究授業 W I Q Wayo Inquiry ～プログラムデザインへの挑戦～

和洋国府台女子中学校・高等学校

大窪 拓矢 大竹 瞳  
小高 涼 高橋美絵子  
土田 尚樹 中澤 美紀  
丹羽 祥 村上 喜恵

## 1 はじめに

2020年度に入学する生徒のカリキュラムに、新たな教科が加わった。「総合的な探究の時間」というその教科には、教育を担う人々の希望が込められている。教えられたことをテストで再現することが「勉強」だと思っている生徒達へ、自ら思考し発見する興奮を味わってもらいたいという希望である。ほとんどの生徒が大学へ進学する本校であっても、学問の深遠な淵を覗く経験を持っている生徒は少ない。大学受験合格を目指すのであればなおさら、誰かの作った模範解答を求めるのではなく、自ら課題設定をしてその答えを追っていく探究心が必要不可欠であることは言を俟たない。さらには、「総合的な探究の時間」が、本校の目指す「凜として生きる」人材育成に寄与することが期待できると考え、カリキュラムに2単位のボリュームで導入したのである。

本稿は、探究科が発足するまでの経緯や、和洋独自の探究プログラム W I Q (Wayo Inquiry) が軌道に乗るまでの試行錯誤をアーカイブとして残すことで、今後の探究学習の発展につなげることを目的とする。

## 2 探究プログラム開発の経緯

### 2-1 学習指導要領と「総合的な探究の時間」

平成30年(2018年)告示の学習指導要領では、従来の「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」へ科目名が変わった。もちろん、変わった点

は科目名だけではない。

以下は学習指導要領(文科省 平成30年)の第4章『総合的な探究の時間』の目標である。

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(下線筆者)

「総合的な学習の時間」での目標と非常に類似しているが、新たに「課題を発見し」という要素が加わったことに注目したい。この後に続く文章にも「課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け」や「自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができる」とある。つまり、与えられた課題について調査したり考えたりするだけでなく、疑問に思う心や問題意識をまず持つことを目標として掲げているのである。

このことは、昨今の社会の変化が大いに影響している。現在、「VUCA」(変動性・不確実性・複雑性・曖昧性という四つの英単語の頭文字を取った言葉)というワードが人口に膾炙している事実が示すように、既存の価値観や常識が通用しない時代の中にあることを誰もが実感している。AIが多くの労働を代替することが可能になると言われ、AIにない能力を自覚的に獲得する必要性を多くの人が感じる中、学校教育にもその視点が導入されたのである。

## 2-2 WIQプログラム開発の経緯

このような社会や教育界の流れを受け、本校ではどのように「探究」の授業が導入されてきたのか。その発端となる出来事から時系列で振り返り、今後のアーカイブとしたい。

現在（2023年）から遡ること10年前、2013年に太田陽太郎前校長が「スキルアップ研修会」というチームを結成した。当初は、英語・国語・理科・数学・社会の中堅教員を集め、1年間定期的に外部講師からの研修を受けるという内容であったが、より高次の教授法研究を目的として翌年から本校教員独自の研究チームとなった。当時は「アクティブラーニング」が提唱され、教師の役割が従来の一方的教授者からファシリテーターに変化していく過渡期であった。定期研修会では中核メンバーに加えて有志の教員が参加し、教科横断型の研究授業の実施、アセスメント研究、他校への授業見学など、そこでの数々の活動が現在の探究授業プログラムの基盤となるのである。

2015年に現理事長が就任し、国府台校から和洋女子大学への進学者を増やすという経営方針が伝えられた。コースを再編し、多くの生徒がそのまま和洋女子大学に進学するシステムを作るよう理事長より高校側に指示が出されたが、この再編が生徒にとっても中高にとっても選択肢を限定するものとならないよう、試行錯誤が始まった。その中で「スキルアップ研修会」は「カリキュラム骨子委員会」として、カリキュラム作成の基盤となるコース設定とそのコンセプト作りを任されることとなる。

この間、大きな刺激をうけた出来事を述べたい。それは2018年、カリキュラム骨子委員会のメンバー及び有志教員、宮崎康新校長とで赴いた、北海道の新陽高校への視察である。新陽高校は、一時募集停止も危ぶまれるほど生徒数が減少したが、民間企業出身の荒井優氏が校長となり、改革を断行してV字回復を果たした学校である。その学校経営に関する手法や決定プロセスも大変参考になったが、ここでは「探究コース」と「探究基礎」の授業について言及したい。「探究コース」の教室にはいわゆる普通

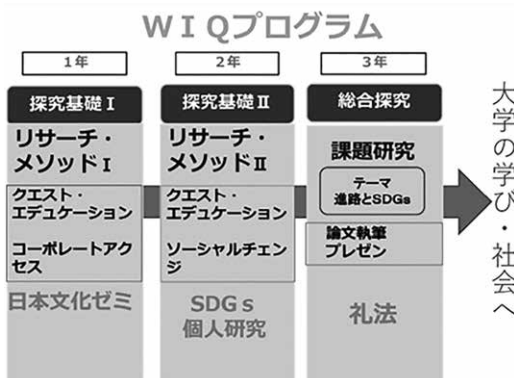
の机と椅子はない。生徒達はテーブルにチーム毎に着席し、疑問に思ったことを友人と討議しながら、仮説を立てて検証していく。教師はアドバイスはするが、基本的に全体に対して教えない。基本事項は学習支援システムを使用し生徒個人が習得を進め、その管理をコース責任者が行うのである。このコースで学んだ生徒は一般選抜入試には対応できないと思われるが、今社会が求める「自分の頭で考えられる人材」になるのではないかと、驚きをもって見ていた。この時の経験が、後に高大連携コースとして新設される「和洋コース」に大きな影響を与えたのである。また、「探究コース」とは別に、総合コースの生徒が受ける「探究基礎」という科目のプログラムの説明も受けた。これは週4単位、複数の教員が自分の興味のある分野のゼミを用意し、生徒が希望のゼミに入って研究を行う授業である。実は本校でも以前似たような取り組みを実施していた。このことは、我々が探究授業のプログラムを作り上げるにあたって、今まで学年や個人が取り組んできた企画やアクティビティが有用であることを明確に意識する契機となったのである。

その後、2019年から探究科が発足し、本格的な探究プログラムの開発が始まった。幾多の研修会や書籍から学んだ活動等も導入したが、最も信を置いたのは、現在まで本校の教員が積み上げてきた取り組みであった。しかし、学年や個人の教員中心で生徒に提供してきた学習活動は本校の強みではあるが、その反面弱点にもなる。なぜなら、その時の学年や担当者次第で、どんなに優れた活動も実施・継承されない場合もあり得るからだ。さらには対外的に和洋の取り組みとして紹介できないもどかしさはらんでおり、個としての力が全体に昇華できていないという実情があった。プログラム開発で我々がまず意識して行ったことは、過去の活動の情報を収集し、目的と順序を考慮しながらそれらを体系的に組み上げて整理することである。そして、それをどのコース・学年の生徒も全員体験できるようにしたのだ。このことによって、和洋独自の探究プログラム「WIQ」は、どんな高校にも引けを取らない、長い年月の中蓄積された知見の集大成となったのである。

### 3 実践報告

#### 3-1 全体概要

WIQは「リサーチメソッドの習得」「グループによる活動」「個人研究」という3つの柱を、1年次2年次とスパイラルで行い、3年生で行う総合探究での論文執筆を最終的な目標として構築した。また高校3年生において、1学期までにおおよその執筆を終わらせることで総合型選抜や推薦入試の受験準備に繋がるように、また2学期以降は一般入試準備に大きな負担とならず大学進学以降も役立つであろう言語技術（アカデミックスキル）の習得をメインとしたプログラムとした。評価は基本的に行わず、毎回の授業で生徒自身に振り返りを文章化させフォームで提出させた。



以下に1年目の中川学年での取り組みを元に次年度以降も実践可能なプログラムに調整しつつ行っている2年目の中澤学年での取り組みと今後の流れを示す。

#### 高1 探究基礎Ⅰ（月曜5・6限）

1	オリエンテーション	リサーチメソッド
2	PCスキル	
3	言語技術	
4	質問作り	
5	調査・分析法	
JSB講演会（*時間数調整のための学年活動）		
6～10	コーポレートアクセス	PBL
	夏休みの課題	
11～20	コーポレートアクセス 学年代表者プレゼンテーション	
21～25	日本文化ゼミ1～5	個人研究

#### 高2 探究基礎Ⅱ（木曜5・6限）

1	オリエンテーション	リサーチメソッド*
2	和洋女子大学教員による講演会	
3	言語技術Ⅱ	
4	データの見方・見せ方	
5	SDGs 外部講師による講演会	
6	SDGsを知る	
7・8	ソーシャルチェンジ1・2	PBL
9	探究型読書・前	*
	課題 探究型読書・中	
10	探究型読書・後	
11～17	ソーシャルチェンジ3～9	PBL
修学旅行有田フィールドワーク発表会		
18～22	SDGs探究	個人研究

#### 高3 総合探究（R4年度土曜4限→出張教員多数、木曜が望ましい）

1	オリエンテーション	個人研究
2	課題研究1	
3	ミニデバート	アカデミックスキル
4～8	課題研究2～6	個人研究
9・10	論文を読む	アカデミックスキル
11	グループディスカッション	
12～19	言語技術	

#### (1) リサーチメソッド・アカデミックスキル

リサーチメソッドでは、探究活動を行う上で必要不可欠な技術や考え方を教示し実践することを目的としており、1年次にはグループで活動を行う際の注意、全員が持つChromebookの使用について、PCスキル・質問作り・調査分析方法を、2年次には和洋女子大学の教員による研究についての講演会・データの取り扱い・SDGsについて・探究型読書を行った。また、平成28年年度から毎年2～3人ずつ

研修を受けている言語技術をすべての学年の取り組みの中に組み込み、高校2年生からNHK高校講座「ロンのちから」(10分番組)を視聴し要点をまとめる取り組みを取り入れ、論理的に思考し、適切に表現することの一助となることをねらいとした。各講座の詳細は後述する。

(2) グループワーク PBL

株式会社教育と探求社の現実社会と連動しながら「生きる力」を育む教育プログラム「クエストエデュケーション」を取り入れた。

○コーポレートアクセス

1年次には企業探求コース「コーポレートアクセス(全24回)」というプログラムで実在する企業へのインターンを教室で体験する。企業から出されるミッション(正解のない課題)に、仲間と知恵を出し合って取り組み、自分たちの企画をプレゼンテーションする。企業人や大学教員からの助言やサポートを受けることでより視野を広げる機会となった。

STEP	活動	内容
1~6	活動の準備をする	インターン先企業にエントリーし、新人研修に取り組む
7~12	会社の仕事をする	アンケート調査を行い、企業からのミッションを受け取る
13~18	ミッションに取り組む	企画会議を開きアイデアをまとめ、中間報告を行って企画の見直しをする
19~24	プレゼンテーションをする	「プレゼンテーション研修」の後に最終報告をしてすべての活動を振り返る

生徒の振り返り

1番最初の授業で、今回の学習は実在する企業からのミッションにも取り組むということ聞いたとき、とても驚き、緊張したが同時にとても興味深い学習内容だと思った。そして、学習を終えた今、自分の中で漠然としていた企業のイメージが掴めて、『企業への理解を深める』という目的を達成することができた。また、班のメンバーと協力して事業を作り上げる中で、自分にはなかった新しい視点を持つことができたり、企業の方から頂いたアドバイスを踏まえてより良い企画案を作り上げようとしたことで、とても充実した時間を過ごすこともできた。更に、報告会を重ねる度に自分たちのプレゼンテーションの能力の上達を感じることができ、とても楽しかった。そして、グループ結成時にたてた「お互いの意見を尊重し、楽しく話し合いより良い結論を

導き出そう。この活動を通して自分の夢に近づこう」という目標も達成できた。この経験を活かして、色々な活動に取り組みたいと思う。

「クエストエデュケーション」の活動が一番印象に残ってます。そこでは、企業から与えられたミッションをもとに自分たちで問題解決するために様々な手段を試しました。その際、「相手の意見を否定しない、そして尊重し合いながらお互いを高め合っていく」という探究授業の理念に心が支えられ、新しいアイデアを出す楽しさを知ったきっかけになったからです。

企業インターン(クエストエデュケーション)で、企業から与えられた課題に対して、チームの意見をまとめて、その課題に対する解決策や問題点を提示する活動がとても印象に残っています。実在する企業からのお題は今の現代社会の問題と深い関わりがあり、日本の社会情勢について知ることができました。また、インターン先の企業が飲食店だったので過去のデータから飲食店の店内や顧客、対応の特徴などが知れて面白かったです。私達のグループは学年全体での発表まで残り、実際にその社長さんにプレゼンを聞いて頂ける貴重な機会もあって嬉しかったです。

私は一年生のときに取り組んだ企業の方とコラボをして、各企業のテーマにそって取り組んだものが一番印象に残っている。私はパナソニックの企業とコラボをし、みんなが健康に過ごせるような新商品を開発した。新商品を開発しようとあれこれ考えることって、今までしたことがなかったし、そういった職業につかない限り開発をするためのアイデアを出したりすることはないので、この取り組みで新しい経験ができ、とても楽しく取り組めたので特に印象に残っている。



### ○ソーシャルチェンジ

2年次には社会課題探求コース「ソーシャルチェンジ(全12回)」というプログラムで困っている人を助けて笑顔にする企画を考える。自ら見つけた社会課題に当事者として向き合い、その解決方法をチームで考え企画にまとめ、ポスターを使ったプレゼンテーションを行う。なお、特進コースは英語で行った。

STEP	活動	内容
1~3	学校の課題に取り組む	学校の身近な課題に取り組み、意見を出したり話し合いをする練習をする
4~6	取り組む社会課題を決める	困っている人を探し、笑顔にする企画を考えてプレゼンにまとめる
7~9	企画を磨き込む	クラスメイトの意見や「チェンジメーカー」から学び、企画を最高のものに仕上げる
10~12	最終発表と振り返り	ポスターセッション形式で自分たちの企画をクラスのみみんなに発表する

### 生徒の振り返り

1番最初の探究の授業で、「社会を変える」というテーマで学習すると聞いたときは、とても難しくくて、大変なことに思えた。また、この学習を始めた頃の私は、「社会を変える」というと、「日本の貧困をゼロにする」や「環境問題を解決する」など、規模が大きく、自分たちの力だけでは、解決不可能な問題ばかりを思い浮かべていた。しかし、この学習を通して、自分の周りにいる人を笑顔にしようと行動するだけでも、社会を変えることに繋がるのだと気づいた。そして、いつも大きな規模で、物事を考えるのではなく、たまには、自分の身の回りを見渡すことも大切だと考えた。マクロな視点、ミクロな視点、どちらも持つことで、課題に対して、最高の解決策が生まれるだろう。

ソーシャルチェンジの課題で、困っている人はいないか、自分にできることがないかを考えたことで、自分のことだけではなく、周りの人や物を注意深く観察したり、意識を向けたりする力がついたと思います。

探究でやったすべての時間が自分の糧になると思うが、特にクエストエデュケーションは貴重な経験ができた。



### ○旅行行事をフィールドワークの場に

新型コロナウイルスの影響で初年度の旅行行事がごとごとく中止や延期になり、当初のイメージにあった旅行行事と探究学習を関連付けさせる事が難しくなってしまった。2年目にあたる中澤学年は従来通りの長崎を中心とした九州北部をめぐる行程であったため、江戸時代から続く伝統工芸の街、有田をフィールドワークの場としSDGsを考えるというテーマを持たせ見学し、事後学習として報告会を行った。丹羽学年からは行程が大きく変わるため、効果的な取り組みとなるようアレンジ出来る部分がないか検証しなければならない。

### ○まとめ

外部の既製プログラムを使用することで教員の負担を減らすと同時に、クエストカップ出場のための期限があることで全体のスケジュールにもメリハリが生まれた。企業やチェンジメーカーといった学校外の人との繋がりができることで見方や考え方が広がり、また同じプログラムに取り組んでいる全国の学校が集うクエストカップに参加し、選抜され

ることで自信をつけることが出来た。またそのチャレンジを大学入試の際の自己PRに活用する生徒も多数おり、努力を具体的に語る事が出来る経験となった。

大きくは同じ正解のない課題に対して、グループで力を合わせて解決方法を考え、それをプレゼンテーションするという流れであるが、1年次には課題は企業から与えられ、2年次には社会課題から自分たちで課題を見つけるという発展性や、発表の仕方も1年次はスライド、2年次はポスターと手法が異なることも、われわれWIQのコンセプトと良く合っていたと感じる。その後のSDGs 個人研究への流れにもつなげていくことが出来た。



ソーシャルチェンジングリッシュ全国大会

### (3) 個人研究

○高1 3学期

日本文化ゼミ

目的：個人研究の体験、レポート作成の実践、和洋教育の一つの柱である日本文化の学びの機会とする。

内容

1学期中に担任の先生に講座開講の準備をしてもらい、生徒に告知。

\*琴・合気道については講師の先生に早めに依頼をし、了承を得る必要がある。

2学期に入り、9月中にゼミ分けを行う。(クラス解体)

2学期の終わりから3学期にかけて、5～6回×2時間で体験・調査研究を行い、レポートを作成。体験型は表紙と参考文献以外を1枚、研究型は2枚以上を執筆すること。

共通の「レポートとは」というスライドを使用し1時間程度の講義を行い、「仮説を立てる」ことを意識付けする。

\*講師の先生の出勤日について教務部長に連絡

令和2年度	令和3年度	令和4年度
合気道	合気道	合気道
箏	箏	箏
「和」を究める	「和」を究める	近代日本・庶民の生活文化
百人一首で学ぶ日本の心	和菓子	日本アニメ・漫画
地域の成り立ちから学ぶ日本	和算	日本の折り
日本舞踊	リサイクル・リユース	結び
Cool Japanを紹介しよう!	折る・たたむ・包む文化	魅惑の宝塚歌劇
伝承遊びで日本を知ろう	着付	Cool Japanを紹介しよう!



和菓子作り体験

生徒の振り返り

日本文化ゼミが一番印象に残っています。私はcool japanに参加しました。自分の好きな日本文化を紹介すること自体もちろん楽しかったですし、わかりやすく伝えるためにはどのような工夫をすれば良いのかを考える機会にもなりました。

日本文化〈百人一首〉を学んだことで、文章読解のときに背景知識がわかっているのので、理解が深まった。

○高2の3学期～高3の1学期

SDGs × 進路 論文作成

使用テキスト：『課題研究メソッド』『課題研究ノート』いずれも啓林館

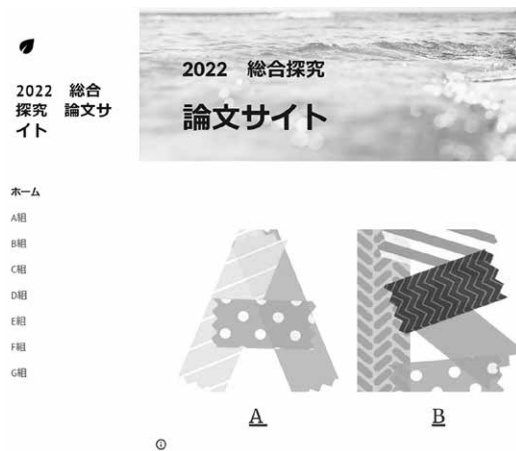
目的：探究活動の集大成となる個人研究、論文作成の実践。

内容

高2の3学期のうちにテーマを探し、高3の1学期に調査を行い、夏休みに執筆を行う。テーマは自

分の進路でSDGsに関わるものを基本としており、進路に関わることを優先とし、自分の受験計画に無理の無いテーマ選びを行うように声かけを行った。

1回の授業でテキストの1章ずつの内容の確認と個人作業、ロンリのちからの視聴を行う。ロンリのちからの視聴が終わった後は個人面談の時間とする。高2の3学期に大学の図書館のオリエンテーションを和洋コース以外のクラスに行い、大学図書館での情報収集も可能な環境を整える。SDGsをテーマとした朝日新聞ジャーナルを使用したNIE、SDGsと関わりのある研究テーマに取り組んでいる和洋女子大学の杉浦先生の講演をプログラムに取り入れた。課題研究ノートは全員必修のページを指定、それ以外のページは必要に応じて取り組む。提出は夏休み前と論文執筆後の2回。



論文はドキュメントに入力し、サイトにアップし、学年内で閲覧が可能ないように整えた。

論文は書かれた後、必ず誰かに読まれ批評されるものである。その経験もさせる必要があると考え、グループを指定し、メンバーの論文を読み、批評を行わせた。

2学期の言語技術のプログラムの中でパラグラフで書く、要約するという内容を扱い、最終的に自分の書いた論文を要約し要旨としてA4 1枚にまとめ、卒業時にクラス毎の冊子にして配付した。

生徒の振り返り

論文執筆が一番印象的でした。普通は大学生で学ぶ執筆方法だったり、言葉の使い方、論文のまとめ方

を先取りできたのは大学生になってから必ず助けになってくれると思いました。また、論文執筆に当たって自由に研究できた点も嬉しかったです。やはり、自分にとって興味のある分野を進んで学ぶことで、普段勉強しては味わえない学びの楽しさを実感できたからです。

論文執筆をしたことで、様々な情報源からまとめる力を身につけることができた。また、正しい情報なのか確認することやグラフを見ながら比較する力も身についたと思う。

大学の授業などでレポートを書くことがありましたが、引用の仕方や文の構成などが詳しく理解できないままやっていたのですが、今回課題研究メソッドを使いながら正しい順序で論文を書いたことで、文章力がとても身についたと思います。

論文を書く際にいろいろな調査をする段階で調査の仕方や、フォームを作って回答をまとめたりと特に、街中で調査をし、アンケートを行うことにより、社会への関心度や、調査力を上げることができました。

論文の執筆をしたことで項目立てて文章を書いていく文章力や必要な情報を選別し論文にまとめる読解力がついた。

論文を執筆するに当たり課題を探す力、それについての的確な情報を見つける力、論理的に文を書く力などを身につけることができた。

論文で自分の研究結果を論理的に組み立てる力がついた。

#### (4) 高3日本文化

##### 1 目的

高校3年生の総合探究では、2時間のうちの1時間で茶道を学ぶ。茶道における基本的な礼儀作法や立ち居振る舞いを習得し、茶道を通じて日本文化への理解を深める。

## 2 探究科における新たな取り組み

日本文化の授業は和洋が教育プログラムの柱として掲げているもので、その中でも20年以上続く茶道の授業は唯一1年を通して授業を行う重要なプログラムである。しかし茶道は学校独自のプログラムであるため、現在のカリキュラムでは、高校三年生の探究の時間に茶道を行わざるを得ないのが現状である。そこで探究科として茶道の授業内容以外の部分で新しい取り組みが出来ないか思案した結果、生徒が授業内容をまとめてレポートを書き、それを学校ホームページで公開することとした。授業の様子を学校内外に広報すること、また、生徒に主体性をもって授業に取り組ませることが目的である。今年度は各クラスの探究係2名がレポートを書くこととし、クラスごとに輪番制とした。

## 3 ホームページへの掲載手順

- ①学年主任及び第三学年の担任教諭、茶道の講師へ主旨説明をし協力を要請した。
- ②生徒探究係へ取り組みの主旨を説明し、1年間の当番を決めた。
- ③レポートをやり取りする場として、グーグルドキュメントを生徒・教員間で共有した。
- ④ホームページ掲載までの1週間のスケジュール

月火	授業／探究科の教員が授業写真を撮影
木	レポート提出期限 写真をクラスルームに掲載
金	茶道の講師による原稿チェック
土	学年主任、ホームページ係の教諭が原稿 チェック後、ホームページ係が掲載作業



## 4 振り返り

生徒は自分たちの記事がホームページに掲載されるということで、責任感をもって主体的に取り組んでいた。その一例として、授業内容が前週と同じだった週には、生徒たち自らが講師へのインタビューの企画を考え、原稿を執筆した。

広報の面でも好評で、掲載をきっかけにバイエフエムでの生徒のラジオ出演が実現した。



また、受験生からは「ホームページで茶道の授業の記事をみて、受けることを決めました。」という意見を頂いた。和洋が20年以上にわたり続けてきた茶道を中心とした礼法の授業の具体的な取り組みとその意義を広く知っていただくことができた。

一方で、次年度同じ取り組みを継続するための問題点としては、今年度は探究科の教員が高校3年の授業を行っていたので写真を撮影することが可能だったが、掲載の手間などを考えると探究科以外の教員には負担が大きすぎるという点がある。また、それと同様に今年度は広報部のホームページ係が探究科に所属していたので、そのまま茶道の記事掲載の係となったが、そうでない場合には、ホームページの編集を担っている広報部にバナーの作成や記事の掲載を毎週依頼する必要がある。今後も取り組みを継続するための方法として、ホームページの教科コンテンツの編集の権限の変更や、広報の効果は限定的なものとなるが、学校ホームページへの記載ではなく、グーグルサイトを活用し学校内のみでの公開にすることなども視野に入れて考えていく必要がある。どちらにしても、ICTスキルのある教員に業務が集中する状況でなく、教員全体のスキル向上を図り、いかに業務を分担し継続可能な取り組みにしていくかが今後考えるべき課題である。



### (5) 和洋女子大学との連携

大学の先生に関わっていただいたこと

高1：和洋コースのコーポレートアクセスのプレゼンテーションを観てコメントを頂く。

高2：年度の初めに「研究する」というテーマでの講演。

和洋コースのソーシャルチェンジのポスター発表を観てコメントを頂く。

年度の終わり頃、SDGs 個人研究のテーマ探しの段階で講演をしていただく。

大学図書館を利用しテーマ探し。

高3：無し（和洋コース生は個人的に授業に関わりのある先生に質問している様子が見られた）

いずれも高大接続の窓口となってくださっていた副学長の金丸先生にスケジュールを早めにお伝えし、参加してくださる先生を募っていただくという流れであった。

和洋コースの発表見学は、和洋コースの生徒たちの大学進学にあたって調査書に数字として表れる部分だけで判断せず、コースの特徴である探究的な活動を評価するべく、参加していただいている流れがある。そのため各学科からの先生の見学をお願いしているが、この3年間の様子からはこちらの意図とはズレを感じた。令和3年度から全学教育センターの先生方には和洋コース生の授業を担当していただいております。そちらの先生方は状況を理解していただいていたように感じた。それでも和洋コース生にとっては多くの大学の先生に直接アドバイスを頂く場となり、また大学進学に向けた大切な自己PRの機会と認識し、より一層前向きに取り組むモチベーションとなっていたように感じる。大学教員による講演も具体的に研究の話を伺うことが進路研究の場となった生徒も少なからずおり、大学との連携は正直なところ当初の考えよりは大幅に少ないのが事実であるが、現状ではこれが限界であるし、併設の大学がある分、他校よりは恵まれた環境にあるのだとも考えられる。令和4年度になりいよいよ次年度に和洋コースの1期生の大学入学が目前となってからは、世の中の高大連携プログラムのスタートとも相まって、人文学部FDに呼ばれ探究の取り組みを紹

介する機会を作っていただくなどしてようやく少しずつ大学の先生方の関心が生まれてきたように感じた。大学図書館の利用ひとつとっても初年度は全く取り合っていただけなかった事前の利用証作成も次年度はスムーズに作成していただけた。今後の連携に期待したい。

## 3-2 リサーチメソッド・アカデミックスキル 各講座詳細

### (1) グループワーク

#### 1 授業の目的

探究学習は、どんな環境なら効果的に行うことができるだろうか。まず生徒同士が臆することなく意見を言い合えるような場づくりが必須であろう。しかし、実際にどうすれば良いか。本時では、生徒とともに教員も、探究基礎の授業の目的や意義について学び、そして、授業で行うグループワークの目的や方法を実際の活動を通して理解することを目的とする。

#### 2 本時の目標

- ① 探究基礎の授業の目的、授業で身につける力、3年間で学ぶ内容を理解する。
- ② 授業で行うグループワークの方法と大切にすべきポイントを実践を通して理解する。
- ③ アクティビティを通して、クラスメイトのことを知ると共にグループワークに慣れる。

#### 3 授業の内容

##### ① アイスブレイク

自己紹介ワークを通して、クラスメイトのことを知る。話を聞く時のルールを学ぶ。

##### 【話を聞く時のルール】

- ① 応援するつもりで聞く。
- ② 途中で遮らず最後まで話を聞く。
- ③ 自分のエピソードや意見を挟まないで、ただ聞く。

##### ② 探究基礎の授業を行う目的

社会の変化によって求められる力が変わっていることを知り、探究基礎の授業はこれから必要な力を

つけるために行うことを理解する。

**【これから必要な力】**

= AIにできないことをできる力

- ①「0」から「1」を生み出す力
- ②協働してプロジェクトを達成する力・何かを生み出す力
- ③社会の変化に柔軟に対応する力

③ 探究基礎の授業で行うこと

3年間の探究基礎の授業で学ぶことや身につけた力を知り、これから1年間の探究基礎の授業の流れを理解する（2章参照）。

④ 基礎スキルⅠ グループワーク

「協働して問題を解決するためには、グループのメンバーがどんな関係になれば良いか」を考え、ワークを通してそれを体感する。

**【意見交換をする時に大切なこと】**

- ①どんな意見も尊重する。
- ②相手を尊重する態度で意見を言う。
- ③自分の発言が批判されたからといって、人格を否定されたとは思わない。

⑤ リフレクション

今日の授業で学んだことをグループ内で共有し、グループの代表1人に発表させるなどして、クラス全体でも学びを共有する。その後、クラスルームに課題で出されているフォームにて各自リフレクションを行う。

**4 まとめ**

高1の担任は全員、この探究基礎の授業を担当するが、教科の特性や性格もあり、探究学習やグループワークに不慣れな教員もいるかもしれない。しかし、探究の学びは、生徒たちがお互い緊張して言いにくいことが言えない状態では成り立たない。この授業が、教員にとってもグループワークの方法や効果を理解する機会となればと思う。生徒は大人よりずっと柔軟で飲み込みも早い。教員がわからなければ生徒に聞けば良いと思う。この授業に限らず「共

に学ぶ」を探究の授業のキーワードにさせていただきたい。また、担任の受け持つ探究基礎の授業は、担任が「どのようなクラスにしたいか」を考え、それを体現する場でもある。探究基礎の授業を通して、教員自身がどんな授業を行いたい、どんなクラスにしていきたいかを考える機会となることを願う。

**(2) 統計とアンケート**

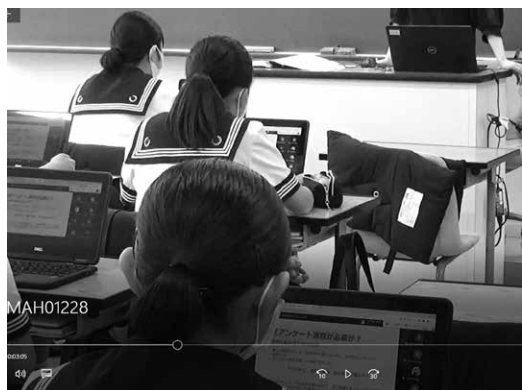
**1 講座の目的**

探究学習においては、自分の考えや意見を方向付けるため、または裏付けるためのデータを取る必要性がある。そのデータの取り方と集計・分析の方法について学ぶ。

**2 内容**

統計的問題解決過程（PPDAC）の段階の一つである「データの収集」そして「分析」の方法を簡単に講義し、実際にアンケートを作成する。

※PPDACとは、課題解決における各段階を・Problem（課題の設定）・Plan（計画）・Data（データの収集）・Analysis（分析）・Conclusion（取りあえぬ結論）に分けた考え方である。この手順をくりかえすことで学びを深める。一般的にはPPDACサイクルと言われる。



**3 授業の展開**

**3-1 1時間目**

- ・今後探究を進める中で、自ら課題を見つけ、それを解決していく中で、自分の考えや意見を方向付けるため、または裏付けるためのデータを取る必要性が出てくることを説明
- ・統計的問題解決における各段階PPDACの説明

- ・NHKアクティブ10の動画を流す
- ・動画とからめて質問のタブーについて考える
- ・Googleフォームでのアンケート作成動画視聴

### 3-2 2時間目

- ・アンケートを取った後の集計作業の流れの説明
- ・アンケート結果の確認の方法動画視聴
- ・Googleスプレッドシート体験
- ・検定／解析
- ・グラフの紹介／数値統計の紹介
- ・アンケート調査等のデータのまとめ・グラフ化・分析を自分たちでやっていく必要が出てくることを説明
- ・与えられた条件にそってGoogleフォームでアンケートを作成してみる
- ・リフレクションシート入力



## 4 振り返り

探究学習では、課題の設定を自ら行い、計画をたてて課題解決を進めていくことになるが、どのような調査・分析を行えば、課題を解決するために適したデータを取ることができるかを考えることは、PPDACサイクルにおいて、とても重要な段階である。

授業では、Googleフォームでのアンケートの作り方・取り方を講義し、実際にアンケートを作成してもらう。集計後に、統計的な手法を使って、いかに集めたデータを分析していくかについても触れるが、そこについては、数学や情報の授業等も通して、段階的に習得していくこととなる。

自分の意見を述べるときに単なる印象で話しているとは説得力が生まれにくい。客観的なデータをもつことで、話の説得力が生まれる。だからこそ、PPDACサイクルをしっかりと意識してデータを活

用してほしい。

PPDACサイクルを意識すること、そして、これまでに探究基礎で学んでいる「言語技術」や「質問づくり」のスキルを活かすことで、適切なアンケートを作成し、データを集めることができる。最終的には、自分なりの結論や主張に辿り着き、効果的なプレゼンテーションやレポート作成等にも活かしてほしい。

## (3) PC (パソコン) スキルとICT活用

### 1 経緯と講座の目的

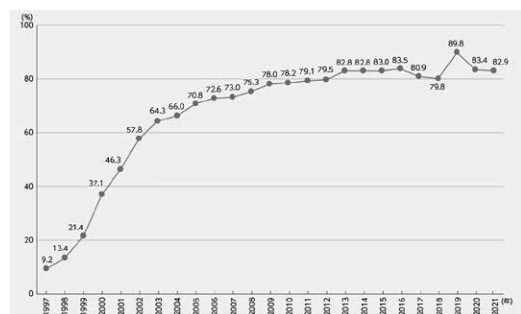


図 インターネット利用率 (個人) の推移

インターネットの急速な普及に伴い、PCやタブレット端末を使用した活動は、学校内外を問わず格段に増えている。2018年に文部科学省より公表された教育のICT化に向けた環境整備5か年計画策定もあり、本校は同年にICT委員会を発足し、Wi-Fi設備や教室の電子黒板化など、校内のICT環境を整える計画を立てた。また、2019年12月に同省より打ち出されたGIGAスクール構想や、2020年4月に政府より発出された新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言も相まって、学校現場でのICTを基盤とした先端技術の活用や、個別最適化された創造性を育む教育の実現が重要視されることとなった。

本校は2019年度より生徒一人一台PC (Chrome book) という環境整備を一学年ごとに進め、2021年度に全学年その環境が整った。現在は、クラウドサービスとして主にGoogle Workspaceを利用している。授業だけに限らず学年活動や委員会・部活動などでもPCを使う機会が多い。どの場面でも共通する根本的な考えとして、「PCの利用は目標達成の手段であり、PCを使うこと自体を目標とはしない」とい

うことを意識している。生徒にも、PCを文具と同様、目標達成のための“ツール”として使いこなせるように活用することを強調している。

探究基礎のPCスキル講座では、大学でのレポート提出や論文執筆、就職活動や社会に出てからも必要なPCスキル（※1）の基礎を身に付け、そのスキルを授業や探究活動、個々の進路実現に活用することを目的とした。その実践内容に加え、探究授業における効果的なPC・ICTの活用シーンなどの報告をさせていただく。（※1 事務処理や書類作成のためのスキル。例：文書作成、表計算、プレゼンテーション資料作成、ファイル管理、メール、検索、タイピングなど）

## 2 探究基礎「PCスキル講座」の内容

2020年4月より行う予定だったこの講座であるが、新型コロナウイルス蔓延防止に伴い休校や分散登校になってしまったため、内容の変更を余儀なくされた。当初の予定では、PC自体の説明や基本的な使い方は別の機会（※2）に行い、探究基礎のPCスキル講座ではプレゼンテーション作成に重きを置いた内容を扱う予定であった。休校期間中はどの教科もオンライン授業になり、Google Classroomにて課題の指示や配信を行っていたため、オンライン授業で頻繁に使うスキルや技術を優先した内容に変更した。（※2 PCの配付作業や基本的な使い方の説明は学年行事として時間を確保している）

2-1 当初の予定：以下の内容のスライドを表示しながら各担当者が説明

「プレゼンテーションを行うためのPCスキルを身に着ける」

### その① 基本スキル

#### (i) 文字入力

- ・フリック入力からキーボード入力へ（書く量が増える、レポート・論文・資料作成）
- ・文章構成能力の育成（並び替え、レイアウト）
- ・ローマ字・かな入力切り替え
- ・タッチタイピングの基礎（ローマ字入力、ホームポジション）

#### (ii) キーボードの操作

- ・ショートカットキー

#### (iii) ファイルの扱い方

- ・WindowsとChromebookの違い
- ・保存方法（ローカルとクラウド）
- ・実践（文字入力）

### その② 応用スキル

#### (i) ワード・ドキュメント

- ・実践（文字の位置・大きさ・書体、図の挿入）
- ・ユーザーインターフェイスに慣れよう

#### (ii) エクセル・スプレッドシート

- ・実践（表作成、式の入力、グラフ化）

#### (iii) パワーポイント・スライド

- ・実践（ドライブから新規作成）
- ・Classroomの課題にて提出

2-2 実際に行ったもの：以下の内容のスライド画面を表示し、音声による説明を入れた動画を作成。同じものを全クラスのClassroomにて配信。

「探究基礎 PCスキル」

その① Gsuite（現Google Workspace）・Chromebookを使いこなす

#### (i) Chromebookとは

- ・仕様の説明

#### (ii) Gsuiteとは

#### (iii) アプリについて

- ・アプリの開き方・使い方
- ・タブという発想
- ・ファイルの保存方法の違い
- ・Gsuite以外のアプリ

### その② タイピングスキルを身に着ける

#### (i) キーボードに慣れよう

- ・フリック入力からキーボード入力へ（書く量が増える、レポート・論文・資料作成）
- ・文章構成能力の育成（並び替え、レイアウト）

#### (ii) キーボードの操作

- ・ローマ字・かな入力切り替え
- ・タッチタイピングの基礎（ローマ字入力、ホームポジション）
- ・ショートカットキー

- (iii) タッチタイピングの基礎知識
- (iv) 練習サイトの紹介

その③ 写真を添付して提出せよ

- (i) 写真の撮り方
  - ・Chromebookのカメラの使い方
  - ・写真の保存場所
- (ii) Classroomに添付して提出
  - ・デバイスから選択
  - ・ドライブから選択

### 3 探究授業におけるPC・ICTの活用例

以下、意識的に利用・活用したアプリやサービスとその活用例を紹介させていただく。

- ・Classroom
  - 連絡ツール、課題の配信・提出・回収・返却
- ・ジャムボード
  - 今までアイデアを出し合う場面では付箋を使用していたが、ジャムボードを用いてオンライン上でアイデアなどを共有し、ブラッシュアップに活用
  - ・ドキュメント
    - 個々の作業：論文執筆、振り返り、メモ帳
    - 「ロンリのちから」の振り返りを毎回ドキュメントに書き足し、ポートフォリオとしても利用。
    - 共同（協働）作業：グループでの文書作成、発表原稿作成
- ・フォーム
  - 授業や講義の振り返りをフォームにて回答・提出
  - 指導要録にフォームで回収した文章を一部使用
  - 論文執筆のためのアンケート調査に使用。クラス単位や学年単位、教職員などに向けた調査を実施する生徒もいた。
- ・Meet
  - 休校期間や出校停止生徒へのオンライン授業、学外の講師から講義を受ける際に使用
- ・Googleサイト
  - 個人やグループの作品・制作物（論文やプレゼンテーション動画）を掲載し、学年内で公開
- ・スライド
  - 授業の指示や講義をスライドで作成し、全クラス同じ内容を説明
  - プレゼンテーション資料の作成

- ・Youtube
  - プレゼンテーション動画を作成
  - クエストエデュケーションの大会にエントリーする際も使用。
- ・共有機能・ドライブ・Gmail
  - 作成したものを他者と共有することで、教室内だけでなく、遠隔地にいても協働学習・協働作業を行うことができる。
  - 発表原稿の共有などにも活用。
- ・アイビスペイント（イラスト描写アプリ）
  - クエストエデュケーションにて、企業からの課題に対しての提案や開発商品についてイラストを作成し、イメージやアイデアを具現化。

### 4 振り返り・所感

#### 4-1 生徒の振り返り

探究の授業においてよく使用する機能は、スライド、ドキュメント、ジャムボード、フォームである。共有や提出の際は、ドライブ、共有機能、Gmailをよく使う。ドキュメントやスライドを平行活用することでプレゼンの質や作業スピードを上げることができる。

手書きで論文や課題をやるのはとても大変でかなりの時間がかかるが、ドキュメントやスライドを利用して課題を出してくれる先生が多く、とてもスムーズに課題をすることができ、時間短縮にもなった。

共有機能があることで、先生とだけでなく生徒同士でも情報が共有できて便利だった。

ドキュメントをノートの代わりとして授業で使用した。わからないことはすぐ調べられるし、手が疲れすぎないので、家でもちゃんと勉強する力が残っている。

グーグルのアプリは全部使いやすくてよかった。

スライドやドキュメントはもちろん、Gmailはチームの人と様々な情報を共有するのに役に立った。

最も使用したのはドキュメントで、課題として長文

を書く際は勿論、議論やアイデアのメモとして様々な形で応用できた機能であった。

研究資料がほしい時や論文執筆の時にフォームとクラスルームが役に立った。

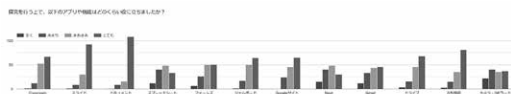
ジャムボードはグループ活動で発言が苦手な人でも意見を出しやすいため、多くの意見が出て役に立った。

Classroomは情報伝達として役立った。また、課題提出もでき、レポートなどがやりやすかった。

#### 4-2 生徒へのアンケート結果

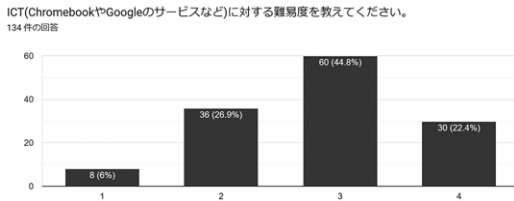
① 探究を行う上で各アプリ・機能がどの程度役に立ったか

※←全く・あまり・まあまあ・とても→



② ICTに対する難易度

※←1: 難しい 4: 簡単→



#### 4-3 所感

クラス内や学年内での発表や話し合いは以前より行われてきたことではあるが、探究授業においてICT活用を意識的に行ったことで、さらに時間と空間を超えた新たな学びが実現されたように感じる。自ら課題を設定し、情報を収集し、整理・分析し、まとめ・表現をする、探究という授業だからこそ、ICTを活用した協働作業や学校の壁を超えた学習を通して、個においての学びを深めるだけでなく、集団においてもより深い学びができたのではないかと。もちろん、実際に自分の足で情報を確かめに行ったり、実験や調査をし、自分の手でまとめたりするこ

とも必要である。すべてのことをICTを用いて行わなければならないわけではないし、自分の手で行った方が効率がよい場合もあるだろう。はじめにも述べたが、PCやICTの利用はあくまでも目標達成の手段であり、それを使うこと自体は目標ではない。ツールとして活用するスキルさえ身に付いていれば、達成したい目標ができたときにその都度使いやすさのものを取捨選択できるはずである。探究授業で身に付けたPCスキルが、生徒たちの生きる力に繋がっていることと信じたい。

#### 5 参考文献

- ・総務省 令和4年版 情報通信白書 データ集(第3章第8節) 3. インターネット利用率(個人)の推移, 白書掲載番号(3-8-1-2) <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r04/html/nf308000.html#n3801020>
- ・文部科学省 GIGAスクール構想の実現について [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/other/index\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm)
- ・教育のICT化に向けた環境整備5か年計画(2018～2022年度) [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/04/12/1402839\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/04/12/1402839_1_1.pdf)
- ・教育課程部会(第121回)資料2 國學院大學人間開発学部初等教育学科教授/文部科学省初等中等教育局視学委員 田村先生発表資料 [https://www.mext.go.jp/content/20201023-mxt\\_kyoiku01-000010203\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201023-mxt_kyoiku01-000010203_3.pdf)
- ・独立行政法人教職員支援機構 児童生徒の協働的な学びにおけるICT活用 [https://www.nits.go.jp/materials/intramural/files/083\\_001.pdf](https://www.nits.go.jp/materials/intramural/files/083_001.pdf)

#### (4) 質問づくり

##### 1 講座の目的

探究活動において根幹となる「問いを立てる」ことを練習する。問題集に取り組み、わからない問題は答えを見て覚えることが勉強だと思っている生徒たちに「疑問に思うこと」を強制的に経験させる。

## 2 内容

- ①「質問づくり」の主旨を説明
- ②質問の焦点「大学」と作った質問を使ってどうするのか目的を発表する。
- ③質問を作らせる
  - 質問をつくるための4つのルール
    - ・できるだけたくさん質問を作る。
    - 目標：一人10個以上！
    - ・作った質問に対して話合ったり、評価したり、答えを言ったりしない。
    - ・発言のとおりに質問を書き出す。
    - ・質問は疑問文で書く。

←「言語技術的文章で」と指示。

- ④つくり出した質問を改善する
  - ・閉じた質問と開いた質問を分類する
    - 〈閉じた質問〉 「はい」か「いいえ」、もしくは一言で答えられる
    - 〈開いた質問〉 説明が必要なもので、「はい」か「いいえ」、もしくは一言では答えられない

- ・それぞれの質問の価値を検討する
  - ・「閉じた質問」の長所と短所は何か
  - ・「開いた質問」の長所と短所は何か
- ・質問の形態を変換してみる
  - ・「閉じた質問」は「開いた質問」へ
  - ・「開いた質問」は「閉じた質問」へ

- ⑤質問の優先順位をつける
  - つくり出した質問のなかから優先順位の高い質問を3つ選ぶ。そしてこれらを選んだ理由を考える。
- ⑥振り返り

## 3 生徒の振り返り

自分の求めている回答を相手が答えるのを待つのではなく、自分でも質問内容を考えて聞くべきだと気づいた。

質問には「開いた質問」と「閉じた質問」があることを初めて知った。今後質問するときは少し考えてから質問しようと思った。

質問を作ることは思っていた以上に難しいということです。とくに開いた質問は友達と一緒に考えないとなかなか出きませんでした。少しずつ克服すべきだと感じました。？

目的をもって質問を考えるのは次につながるが多いと気づいた。質問に答えるときには相手を受け止める姿勢で聞こうと思う。

目上の人から友達まで、質問する内容を場面によって使い分けたら自分の成長に繋がれそうです。積極的に応用していきたいと思います。

これからは自分の意思が確実に伝わるように6W1Hを意識しながら人と話そうと思いました。また、論点がズレていないかも確認しながら話した方がいいと思いました。

## 4 まとめ

2013年に生物の授業で初めて取り組み、その後LHRの進路学習の取り組みとして実践してきたプログラムを探究の授業にこそふさわしいと考え高1のリサーチメソッドに取り入れた。手順・方法がわかりやすく、誰にでも簡単にチャレンジできるが、探究にとって欠かせない知的ツールであるのに、これまできちんと教えたことの無いものだと感じた。またこれを何度も繰り返すことで「疑問に思うこと」が出来るようになるのではないかと考える。講演会の前に行ったり、難解でとっつきにくい単元に入る前に行ったり、応用することができ、深く思考するきっかけにもなると思われる。ぜひ多くの先生に取り入れて貰いたい。

## (5) SDG s 講演会・SDG sを知る

### 1 目的

社会とつながるということも意識したプログラムとするためにも世界共通の目標としているSDG sに関心を持ち、理解を深める。

## 2 目標設定の理由

探究活動の最終目標である論文執筆において、各自の進路に関するテーマとさせたい、かつ世界共通の目標であるSDG sを盛り込むことで社会とのつながりを意識づけさせることができるのではないかと考え、高校2年生での探究ではSDG sをテーマとして進めていくこととした。まずはSDG sを知ること、SDG sを考えていくときに大切な考え方を知る機会としたい。

## 3 授業内容

1週目はこども国連環境会議推進協会の井澤友郭氏による「SDG sを自分ゴト化」するためのレゴブロックを用いたワークショップ。翌週には各自で企業や自治体などが具体的にどのような取り組みをしているかを17の目標別に調べスライドにまとめる。

### SDG s ワークショップ

生徒たちは、まず「今の気分」を表すレゴのパーツを選び、その色や形を選んだ理由などを言葉で説明する。この活動から、考えるだけでなく感じたままを語ってよいということを生徒達は経験し、続いて「あなたの身近や世界に存在する取り残されている人やコミュニティはどんな存在でどのような状態ですか？」という問いに対する答えを、レゴを使った作品として表現するという課題に取り組む。最初は戸惑っていた生徒達もだんだん真剣なまなざしで取り組み始め、最後にはその作品について友達に自分の思いを熱く語る姿が見られた。

### SDG s 調査

以下の内容をスライドにまとめる。

- ①自分の出席番号の横に「自分の名前」「担当のSDG sゴールの番号」と「ゴール」
- ②自分の担当のSDG sゴールの説明と日本の現状
- ③そのSDG sゴール達成に向けての日本での取り組み例（企業・団体・個人）→「具体的な取り組み」を書くこと。

スライド作成後、グループ内で成果発表。

## 4 振り返り

講座では最後に井澤氏から、「学びとは掛け算です。気づき×知識×行動。行動が0なら、全てが0になってしまう。だから少しでも行動することが大切です。」という話を伺い、自分に何ができるか、1人1人が考えるきっかけになったようである。また調査ではPCスキル、グループ活動の復習にもなり、SDG sについて考えはじめるよいきっかけとなった。このあとの探究型読書の新書選びやソーシャルチェンジの土台ともなる共通の認識がしっかりと出来上がった。





## (6) 批判的思考力

### 1 目標

自分や相手の主張の裏付けとなるデータの扱い方を理解することを通して、批判的思考力を養う。統計データを地図に表記する作業を通して、自分が主張したいことを図表を用いて適切に説明できるようになる。

### 2 目標設定の理由

生徒自身が参考資料として扱うデータが、表現方法によって受け取る側に様々な印象を与えることができることを理解する必要があるため。データを見る上で注意すべきことは、これまで各教科を通じて学んでいる。しかしながら、ウェブサイトや新聞・テレビ等においても視聴者に強い印象を与えるためにグラフなどを過度に加工していることがある。そうしたイメージに流されずにデータを見るためには、批判的思考力を養う必要があるため。

### 3 評価（形成的評価）

- ・データの扱い方や見せ方を、様々な統計データの表記を通して理解できたか
- ・自分が主張したいことを図で適切に説明できたか。

### 4 授業内容

#### 1 時間目

- ① 絶対的な数か、相対的な数かで見え方が変わる。図やグラフには作った人の意図が現れていることを学ぶ。
- ② 先入観に注意すること、グラフの目盛りに注意することを学ぶ。
- ③ 視点を変えることを学ぶ。立場や切り口を変えて見ることで、異なる考えや意見が生まれることを学ぶ。

#### 2 時間目

階級区分図を作成する。その際、特定の目的に合うように作図する。ペアを作ってお互いに作ったものを見せ合う。どのような意図で作成したのか言語技術を使って説明する。「同じデータを使っていても、図表は作る人によって変わる」ということを学ぶ。「この図表を作った人は何が言いたいのか？」

「逆の見方はできないのか？」と考えながら図表を見ることを意識づける。

また、次回以降の授業では探究型読書がスタートするため、「さまざまな見方、確かな情報を得るために読書をしよう」という形で本時を締めくくり、次回へつなぐ。

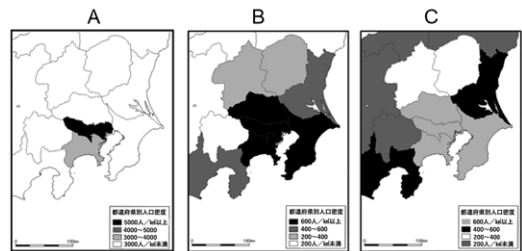
## トレーニング

同じデータを使って、異なる立場A、Bに分かれて図を作ってみよう

- A 「東京都だけ人口密度が高く、他県は低い」と言いたい。  
B 「東京都と隣接している県の人口密度は高い」と言いたい。



	人口密度(人/㎢)
東京都	6216
神奈川県	3796
埼玉県	1939
千葉県	1221
茨城県	484
群馬県	481
群馬県	313
栃木県	313
山梨県	188
新潟県	181
長野県	156
福島県	139



### 5 振り返り

テーマ自体は各教科で取り組んでいる内容だが、抽出しクローズアップすることで意識を高めることができた。クラスにより担当教員の専門科目が異なるが、ご自身の専門分野においてもこうしたデータの扱いでご指導されていることも取り上げていただきたい。そうでない場合も、先生方のご経験を踏まえて具体例などを挙げてお話いただければ効果的だと思う。また、今後の改善案として、1時間目の動画は復習として設定しているが、導入として始めに視聴させた方が効果的かもしれない。また、別途作成のスライド21~25の説明が分かりづらく、本時のテーマと逸れてしまっているように感じため、非表示にしている。また、2時間目の作業については、立場1.2と分けずに自由に区分させて作図させると、さらに多様な図表ができ、おもしろくなると思う。

## (7) 探究型読書

### 1 目的

個人の探究力をつけるための方法としての「探究型読書」を体験し、本を通して、ものごとを深く思考し、自分の考えを組み立て、個人の探究力をつける。

### 2 内容

探究の流れと同様、読む前に「問い・仮説」を立て、読みながら「問いに対する情報を収集」読んだ後に「仮説の検証・考察・まとめ」を行い、さらには自分の問題意識へとつなげていく。

#### 2-1 読前（未知の状態（モヤモヤする）を作り出す）

読むのは表紙と目次のみ。

「なぜその本を選んだのか」「目次から内容のヒントを得て、推測を行う」「読後にどんな自分になっていたいか」等の問いをワークシートに記入

#### 2-2 読中（自分の問い）や仮説を念頭において本を実際に読む）

実際に本を読みながら、読前に行った仮説の検証を行う

#### 2-3 読後（自分の問いとの照合や自分にどう活かすかを考える）

「読前と自分にどんな変化（見方・考え方・感情・行動など）があったか」「この本から得たものをこれからの自分や自分の研究にどう活かしていきたいか」をワークシートにまとめる。

### 3 展開

#### 3-1 1時間目

- ・読書をするのは何のため？

何かをはじめるとき、創り出す時は、組織の共創力が重要。そして、それを生み出すためには、『安心できる場』『方向感（ベクトル）を共有すること』そして、個人個人の『発想力のような思考スキル』や『多様な見方・考え方』が大切になることを説明。

個人の探究力をつけるため、そして、組織の共創力を高める場を生み出すための読書を体験してもらうことを伝える。

- ・本（新書）の役割の紹介
- ・探究型読書を体験

#### 3-2 2時間目

- ・グループに分かれて、ワークシート1の内容について発表を行う。（一人2分程度）
- ・グループ内発表が終わったら、読書の時間（読中）。
- ・夏休み明けに「読前」「読中」「読後」のワークシートを完成させて持参することを伝える。

#### 3-3 3時間目

グループに分かれて（または全体で）、ワークシート3の内容について発表を行う。

- ・読んだ本の内容紹介
- ・SDGsとの関連
- ・自分にどのような変化があったか。その本から得られたものを自分にどう活かすか、今後どのようなことについて調べていきたいかについて



### 4 生徒の振り返り

探究型読書で、SDGsのジェンダー平等について触れられている女性政治家についての本を選びました。レイディみかこさんの「女たちのポリティクス」を読んで、今まで知らなかった各国々の政治家の話に興味を持ち、レイディみかこさんの他の作品も読んでみたいと思いました。そこで、友達に借りて、「僕はイエローでホワイトでちょっとブルー」を読んでみました。この本も政治家のように考えさせる内容でした。このように、探究型読書のおかげで、自分の世界が広がった気がします。

### 5 振り返り

生徒は、初めて体験する読み方にはじめは困惑していたが、目次から内容を推察することにより、よ

り本の内容に関心を持ち、自分の内にある思いを深めることができたように思う。

本（読書）には次のような役割があると言われる。

1. 思考のジャンプ台になる  
→考える力を補助する
2. 視点を上げ底する  
→ものの見方を拡張する
3. 「私」の隠れ蓑になる  
→安全な環境をつくる  
(本を盾にして意見を述べる)
4. 共に進む乗り物になる  
→自由度を広げつつ方向感を他人と共有する
5. 対話の媒介になる  
→人とのコミュニケーションを深める

「探究型読書」の目的として、『読書を通して、組織の共創力が高まる場を体感する』ことがある。この授業内ではできなかったが、本をジャンプ台にしてものごとを考えたり、本を通して多様な見方を知ったり、何かを意見するときに、本に書いてあったことを盾にして意見したり、人とのコミュニケーションの手段にしたり、似たような本を読んだときに、あるテーマに対しての思いや問いを共有することもできる。このような場を体験させることも次回はやってみたい。



## (8) 言語技術

### 1 目標

2016年からつくばにある言語技術教育研究所に毎年複数名の教員が参加し、和洋の言語技術授業確立のために努力してきた。研究所所長の三森ゆりか氏は「言語技術とは、思考を論理的に組み立て、相手が理解できる様に分かりやすく表現すること。」と表現している。グローバル化の加速する現代日本において、世界の人々ときちんとした議論を交わす能

力の育成は急務である。そのような社会状況を鑑みた上で、和洋の言語技術授業では日本語に根ざした日本的コミュニケーションをないがしろにするのではなく、グローバルスタンダードなコミュニケーション技術を学ぶことで、その場その場に応じた適切なコミュニケーションの手段を選択できる生徒を育てていくことを目標としている。

## 2 1年次の授業内容

### 2-1 目標

- (1時間目) 様々な問答ゲームに触れ、対話の基礎の型を学ぶ
- (2時間目) 問答ゲームで学んだ基礎を活かして、英文型の文章を書いてみる

### 2-2 授業内容(2時間構成)

#### (1時間目)

導入 言語技術とは何かを説明する

展開 ①対話と議論の理解

②問答ゲームのルール説明

③基本形、練習1、練習2を行う

基本形：質問に対し、主張→根拠→まとめの順番で話す。

練習1：好きor嫌いの質問に対して、主張→根拠→まとめの順番で話す。

練習2：好きor嫌いの質問に対して、根拠を2つ以上用いて主張→根拠→まとめの順番で話す。

④問答ゲームのまとめ

⑤練習3を行う

練習3：A・Bどちらかを選ぶかという問に対して、主張→根拠→まとめの順番で話す。

結び 次回文章を書くことを告知

#### (2時間目)

導入 問答ゲームの基本の確認

展開 ①練習3の出来具合確認

②英文型の文章の型を説明

型：TS (トピック・センテンス)

SS (サポーティング・センテンス)

CS (コンクルーディング・センテンス)

の順番で書くこと。

③練習3で挙げた項目を用いて、英文型パラ

グラフに則った文章を書いてみる

④できあがった文章を周りと共有する

結び 振り返り（フォーム配信）

### 2-3 所感

コミュニケーションの型に合わせて会話をさせることは、察し合いを基本とする日本人のコミュニケーション手段からすると手間が掛かるように感じるが、くり返すことによってスムーズにできるようになることがわかった。また、問答を行うためには、質問の内容が的確であることが求められるので、話す側よりも話を受ける側の能力向上が必須であるとも思う。なれてきたのであれば、例えば話者・質問者・傍聴者と役割を設定し、やりとりする回数を限定して会話し、その会話が成立していたかを検証し、よりよい質問や会話の内容を考えることで会話レベルの向上が見込めると思う。

## 3 2年次の授業内容

### 3-1 目標

情報伝達の技術を身につける  
空間配列の原理を学ぶ

### 3-2 授業内容（2時間構成）

（1時間目）

導入 1年次の振り返り

問答ゲームを通して、対話の型を思い出す

展開 ①「描写」を学ぶ

描写…視覚で空間的に捉えた対象を、正確に言葉で伝達すること。

「日本の国旗」を例にして説明し、

「フランス共和国の国旗」

「中華人民共和国の国旗」

とだんだんと難易度をあげて説明を繰り返して、情報伝達のルールを身につける。

コロナ禍では意見の共有にジャムボードを使用したのが、対面での授業が可能となった際には、付箋の交換で行った。

（2時間目）

展開 ①「説明」を学ぶ

説明…相手が知らないこと、わからないことに対して答えを与えること。相手の疑問を

できるだけ解明できるように情報を提示する必要がある。

キャンプの持ち物を説明する活動を行う。

### 3-3 所感

誰かに何かを伝える時にはお互いに共通となる基礎があると話が伝わりやすいが、その基礎が人それぞれ違った場合うまく伝わらない。認識の違いを少なくするために、まずは何から説明するかという原則を共有していく活動を低学年時から行うことで、コミュニケーション力の育成が果たせると思う。

## 4 3年次の授業内容

3年次の2学期はアカデミックスキルというくくりで、夏休みまでに作成した論文をもとにした批評活動や、1、2年次に行った言語技術の発展活動を行った。

### 4-1 デイバート

#### I 目的

論文作成のために、客観的・批判的・多角的視点身につける。

#### II 授業内容（1時間構成）

i デイバートの語句の説明

ii 一般的なデイバートの方法を紹介

iii 演劇部による模擬映像を視聴（テーマは「ドラえもんは22世紀に帰るべきか」

iv 実際に行う

4人組を作り、デイバートする側2人とそれをジャッジする側2人に分ける。テーマは前半組「学校の制服は必要か」、後半組「LINEの既読スルーはありか」で行う。行った直後、どちらの論述が優れていたか判定を行い、改善点を共有し合う。

#### III 所感

時間数の関係で1時間しかとれなかったため、あくまでデイバートとはこのような形でやるのだという紹介しかできなかった。以下で紹介するグループディスカッションとの差異を理解させることも大切だと思う。相手ときちんとした議論を交わすにはしっかりと準備する時間が必要であることを理解さ

せると共に、相手の意見を頭ごなしに否定するのではなく、受け止めた上でどのように自分の意見を相手に理解させていくか、その難しさと面白さを理解させていきたい。

#### 4-2 グループディスカッション

##### I 目的

面接試験で問われる意見をまとめる力や傾聴力を鍛える

##### II 授業内容（1時間構成）

- i ディスカッションの語句の説明
- ii ディスカッションとディベートの違いの説明
- iii 5人ほどのグループを偶数組作り、2チームずつに分け、ディスカッションする側とそれを評価する面接官側に分ける。ディスカッションする人たちは椅子を丸く並べ、互いの顔が見えるようにする。面接官はその後ろで見守り、評価シートにコメントを記入していく。

##### iv 実際に行う

前半組「大学生のあるべき姿」後半組「理想的な入試制度」で各班15分ずつ行う。ディスカッション終了後、面接官は採点用紙を特に注目して聞いていた生徒に渡す。

##### v リフレクションを行う

##### III 所感

ディベートよりもディスカッションの方が話が盛り上がっていたように感じた。相手の意見をしっかりと聞いて自分の意見を述べることは、高校3年生までの言語技術指導の成果を感じられるものであった。傾聴力は身につけている一方、論理的に自分の考えを相手に伝えたり、微妙な意見の違いを適切な言葉を用いて説明したりする点はまだ課題が残ると感じた。

#### 4-3 再話

##### I 目的

傾聴力、要点を捉える力、再現力を鍛える

##### II 授業内容（1時間構成）

- i 再話の実施方法と効果を説明

- ii 「行商人の夢」を聞く（1度目のリスニング。ここでは何も書くことを許さず、ただ聞くことだけに集中させる）

- iii 質問がある生徒はいないか確認する

- iv 「行商人の夢」を聞く（2度目のリスニング。ここでは各段落の冒頭だけが書かれているメモシートを配付し、メモを取らせながら聞かせる）

- v 原稿用紙に聞いた内容を再現する（15分間）

- vi 周りの生徒と読み合い、内容を共有する

##### III 所感

文章自体は平易なものだが、約8分程の内容で5～6段落ほどの構成となると、色々と認識の違いが現れて面白い。この活動は低学年時から始めたほうがいい。低学年から相手が話している一言一句にきちんと耳を傾ける習慣があれば、自身の語彙力の向上とともに、話すことや書くことにも良い影響を与えられると思う。

#### 4-4 要約

##### I 目的

物語の基本構造を理解する

要約の基本ルールを理解する

##### II 授業内容（1時間構成）

- i 物語の基本構造「冒頭→発端→山場→クライマックス→結末→終わり」を説明する

- ii 「桃太郎」の構造を考える

「桃太郎」のあらすじを読み、上記に挙げた6項目がどのように配置されているかを話し合う。

- iii 物語の構造を知る効果を伝える

- iv 例を参考にして、キーワード法での要約を説明する

- v 前回再話したものをそれぞれ100字程度で要約する

##### III 所感

やる項目が多かったため、時間に余裕がなく、要約したものを読み合ったり、添削したりする時間が取れなかった。時間に余裕があれば、物語の構造は別の機会に行い、要約と添削をセットにして1時間

分の授業にすると書く視点、評価する視点のどちらも学べていいのかと思う。評価されることを意識して課題文を書けるようになることは受験で必要な能力であるので、効果的な授業であると思う。

#### 4-5 視点

##### I 目的

物語に存在する視点を捉える

主語を意識しながら物語を再構築できるようになる

##### II 授業内容（2時間構成）

###### （1時間目）

- i 「視点」の語句の意味を説明
- ii 「赤ずきん」のコマ絵を見て、赤ずきんと狼の視点ではそれぞれ認知できない箇所はどこかを話し合う
- iii 赤ずきんの1人称目線で「赤ずきん」を書き直す。字数は1000字程度を目指す。また、主語を意識し、できるだけ入れて書くようにする。(15分間)
- iv 書いたものを周りと共有する

###### （2時間目）

- i 「赤ずきん」を狼、作者、帰宅した赤ずきんが事件の顛末を1人称視点で語る、という3パターンに分けて書き直す。グループに分け、各パートをそれぞれ1人の生徒が担当するように分ける。(20分間)
- ii 書いた内容を共有する
- iii jamboardに各視点の特徴を書き出し、共有する

##### III 所感

視点の獲得は文学的文章をよく読んでいる生徒は自然と身につけていることが多いが、あまり読書経験のない人だと視点の切り替えの判断がついていない場合がある。視点の切り替えは他者理解においても重要なことであるので、誰でも知っている話を例にし、立場によってどのように見えるかを話し合う活動は効果的であると思う。

#### 4-6 絵の分析

##### I 目的

絵が何を表しているのか分析的・論理的に捉える活動を通して、鑑賞する態度を養う

##### II 授業内容（2時間構成）

###### （1時間目）

- i 絵の分析の方法を説明する  
情報の観察→情報の分析→情報の解釈→情報の批評の順番を伝える。
- ii 絵の分析の流れを説明する  
全体の大まかな情報→部分の詳細情報→情報の統合の順番を伝える。
- iii 「スキー場の絵」を見て、なぜスキー場の絵だと言えるのか分析してみる。  
jamboardを用いて、質問と対話を繰り返しながらツリーマップを形成する。
- iv 形成したツリーマップをもとに、パラグラフで書いてみる。
- v 解答例を提示して、自分で書いたものと照らし合わせてみる。

###### （2時間目）

- i 「デパートの絵」を見て、配付されたプリントの質問1～5に答える。
  - 1 この絵は何を表現しているか
  - 2 場所はどこか
  - 3 季節はいつか
  - 4 絵に書かれている中で絵を把握する上で重要な人物や、物はなにか
  - 5 絵の中では何が起きているか
- ii 「子供が家路につく絵」を見て、配付されたプリントの質問1～5（iに記載したもの）に答える。
- iii iiで分析した情報をもとに、パラグラフで文章にする。その際、1で答えたものがTS、2～5で答えたものがSSになることを伝える。
- iv リフレクションを行う

##### III 所感

3年間の活動がぎっしりと詰まった授業である。取り扱っている絵の内容は平易なもの、実際にこのようなものを他人に説明しなければいけないときには困惑するだろうと思う。どのような順番で説明すれば、相手の頭の中に自分が想像していることを映し出すことができるのか、これは訓練が必要であろう。人によって焦点をあてているところや、重要視しているところは異なる。ある程度の基準の徹底

を目指すのであれば、低学年時からの積み重ね学習が効果的である。

#### 4-7 論文の批評

##### I 目的

他者の論文を読み、知見を広げるとともに、自身の文章を振り返るきっかけとする

##### II 授業内容（1時間構成）

- i 事前準備として、グループに分けたあと、グループ内の他者の論文を読んでおくようにする
- ii 相手の論文に対して批評する
- iii リフレクションを行う

##### III 所感

グーグルサイトを使用して作成した論文をアップロードし、それを事前に読んでくるように授業を展開している。1学期の時間を論文作成のためのスキル定着にあて、夏休みにしっかりとかきあげてくるという授業構成であるが、一般選抜組からするとやはり論文作成自体は厳しい取り組みになるのかもしれないと思った。しかし、分量自体は高いハードルを設定しているわけではないので、1学期のうちにしっかりと構成を作り上げ、文章にこまめにまとめておくことを徹底させていくのがいいだろう。総合型選抜組は課題との同時並行となることが予想されるが、相乗効果も期待できるので、教員の声掛けはとても大切であると実感した。また、他者の論文を読むことで自身の考えを深めていく活動は大学で必ず役に立つので、このような活動を高校生うちに体験させておく意義はあると思う。

#### 4-8 論文の要旨を作成する

##### I 目的

論文を簡潔にまとめる力を養う

##### II 授業内容

- i 論文の要旨とは何かを説明する
- ii 要旨の構造を2つ説明する
- iii A4 1枚を目安として、7つの項目を意識して作成する

- 1 タイトル
- 2 研究背景
- 3 研究目的

##### 4 研究方法 5 研究結果

##### 6 結果に対する考察 7 展望

##### III 所感

要旨を作ることで、自分の論文を再度読み返すことができる。そこでの加筆修正も行うことができるので、要旨を作る活動には意義があると思う。

##### 生徒の振り返り

一番印象に残っていることは、言語技術を習ったことです。高校一年生から、言葉を論理的に組み立て相手に伝えるトレーニングを行ってきました。高校三年生になって、朗読を聞きながら文章の要約をすることに苦戦をしたことを覚えています。

言語技術を学び、私が生きてきた中で当たり前に思っていたことや基本的なことを1から考えることで、より分かりやすく相手に伝えることが出来るようになった。また、「絵の分析」では直接描いてないことでも、他の所から分析・推測して分かることもあったので、新たな着眼点を見つけることが出来た。

言語技術を勉強したことで、相手に話の内容を簡潔に伝えることが可能になった。勉強する前までは、相手に伝えたい内容を上手くまとめきれず、伝わりきらない事がありました。しかし、言語技術の授業で、伝えたいことは大きな情報から徐々に詳細な情報を伝えるのが良いと学べた事により、話し方がうまくなったねと褒められた事があったので、ものの伝え方、話し方に力がついたと思いました。

ディベートをしたことで自分になかった視点で見る力がついた。

ディベートで根拠をきちんと作るという作業をしたことで、相手に自分の意見を納得させるためには自分の考えだけではいけないということが分かった。

##### 5 展望

言語技術は、自分を相手に理解させることに必要なのであるが、そもそもまず自分が自分を深く認

識するためにも必要不可欠なものであると感じる。生徒たちにとって、普段の生活で場面に応じて最もふさわしい言葉を選択し、それをどのような形で表現することが相手にとって最も理想的なのかを考えて行動することは少ないかもしれないが、もともと習慣がついていれば自然とそれができるようになってくると思う。そう考えると、高校生から始めるのではなく、中学生から体系的に行っていくことが必要となるだろう。また、言語技術指導は多岐に渡るが、それをどのような順番で行っていくのが最も効果的なのかを考えることが大切である。各学年で伸ばしたい能力を考慮し、レベルを分けて繰り返し行っていくことが求められるだろう。どのような社会になっても豊かなコミュニケーション力は必須である。和洋独自の言語技術指導の確立は、生徒の進路選択の場面においても力を発揮すると思うので、今後とも改良を重ねていきたい。

## 4 探究と中学総合との橋渡し

### 1 中学の現状

併設中学においては、以前より学年の活動や各科目の授業において、探究学習は行われてきている。

しかし、高校のように授業科目「探究」としての時間は割り当てられていないため（併設中学では総合的な学習の時間を「英会話」と「日本文化」を学ぶ時間としている）、探究学習やキャリア教育等を行うような総合学習の企画・実施については、各学年に任されているのが現状である。

主に学年による総合学習が行われているのは次のような時間や時期である。

- ・週1時間の「学活」「道徳」の時間
- ・7月、12月、3月の学期末の午前授業
- ・校外学習である「林間学校1・2年」「修学旅行」「遠足」
- ・各教科の授業

各科目の学習や進路に関わる横断的な総合学習はされているが、全てが「探究的」であるかというところではない。もちろん、全ての学習が探究的である必要もないが、そのようなことも含め、中学での総合学習と探究学習、そして、高校へのつながりを今年度中学を卒業する学年の例をとり、見ていくこ

ととする。

### 1-1 2022年度中学卒業生の例

筆者が所属していた2022年度卒業生の学年では、SDGs（持続可能な開発目標）を軸として、次のような総合学習を学年として行った。〈 〉内は協力団体

【第1学年】（SDGsを知る・世界を知る）

- ・「料理とSDGs」〈(株)クックパッド〉
- ・「障がい者のリアルに迫る」〈一般社団法人FACE to FUKUSHI〉
- ・じゅん菜池フィールドワーク〈ジュンサイを守る会〉

【第2学年】（自分を知る・進路を考える）

- ・「今の自分と未来の自分」キャリア教育プログラム〈NPO日本学生社会人ネットワーク〉
- ・進路に関わるさまざまな取組み
- ・SDGs 2030カードゲーム〈和洋九段女子高〉

【第3学年】（自ら行動する）

- ・起業体験プログラム〈JPX東京証券取引所〉
- ・環境教育授業「気候変動への適応策」〈獨協大学松枝ゼミ〉
- ・じゅん菜池出前授業〈ジュンサイを守る会〉
- ・「日本にいる難民」ワークショップ〈聖心女子大学グローバル共生研究所〉

第1学年次は新型コロナウイルスの影響による休校や短縮授業が多く、行事や学年活動を実施できないことが多かったが、第2学年で行ったJSBNによる「キャリア教育プログラム」、そして第3学年でおこなった「起業体験プログラム」は、生徒が自ら考えて課題を見つけ、課題解決のために行動する、まさに探究的な学習であった。

### 2 課題

現状、「総合学習」の内容を決定するのは各学年による裁量による。そのことで、それぞれの学年に所属する生徒の状況に合わせて総合学習の内容が考えられるメリットもあるが、次のような問題も考えられる。

- ・学年により総合学習の内容が異なるため生徒の経験や知識に差が出る
- ・学年教員の負担が大きい



・「探究的な学習」が行われていない

高校の「探究」授業のつながりを考える上でもある程度一定の経験や知識を生徒につけさせる必要があること、そして教員の業務負担を軽くするためにも上記のような問題を学校全体で考えていく必要があると考える。

### 3 展望

これまでの総合学習を経て、次の4つに関しては、継続的に探究的な学習を行っていけると感じた。

「キャリア教育プログラム」(第2学年)

「起業体験プログラム」(第3学年)

「林間学校」に関わる事前・事後学習(第1・2学年)

「修学旅行」に関わる事前・事後学習(第3学年)

また、「じゅん菜池に関わるプログラム」や「起業体験プログラム」に関しては理科や社会の教科と連携し、もっと深く探究をすることができると感じる。

そして、高校「探究」とのつながりに関してだが、中学の間に世界や世界における諸問題を知り、問題意識を持つことで、高校での「探究」の授業がさらに深いものになっていくことは明らかであろう。

2020年以降に入学した中学生は、中1よりクロームブックを使用していることによりPCスキルやプレゼンスキルは上がっている。しかし、探究学習の進め方についての知識や言語技術のスキルは不足しているといえる。中学の総合学習において、その点を補っていく必要があるのと同時に、高1のリサーチメソッドにおいて、その面をより重点をおいて指導する必要性が今後はあると感じる。

## 5 おわりに

### 5-1 アンケート結果

W I Qが導入されて、その一期生が今春卒業した。総括の一環として、生徒達及び探究授業に関わった教員に3年間のアンケートを実施したのだが、その中で寄せられた一部の所感を、記録として以下に記しておく。(ただし、表記を一部改めたものもある。)

〈生徒のアンケートより〉

探究の学習を通して見識を深めることができ、深い思考力にも繋がりました。

チームで一緒に何かをすることで、お互いに譲り合うことであったり、意見を否定しない力がついた。

グループで何かをすることが多かったので、協調性を高められました。さらに、自分で課題を見つけてそれに取り組むことが人生の中で一番多かったです。だから、深く考える力をつけていきかけになりました。

相手と自分の意見が違って相手の考えを尊重することができ、またまとめる際もより多くの意見を使って納得いく答えを出す事ができた。

グループ活動を通して、自分の意見を発信する力がついたと思います。

先生が最後の授業で、探究は受験ではなくその先を見据えた力をつける授業であるとおっしゃっていたのが一番印象深いです。教科を超えた学びは私達に、これからの社会が必要としている力を培ってくれたと思います。

### 5-2 進路への関連性

副次的な効果ではあるが、探究授業での取り組みが進路実現に寄与したことも特筆すべき事柄である。特に昨今割合が増加してきた「総合型選抜」において、語るべきコンテンツを提供できたこと、また、論理的思考技術や表現法を磨いたことにより、生徒自身が自信をもって挑戦できるようになったことは、大きな成果と考えられる。以下、生徒の体験や感想を載せる。

自己PRの際、探究活動で取り組んだ自分の実績を話しました。

ディベートやクエストエデュケーション、クエストカップなど、自分で考えて相手に伝えるという経験を何度もしていたから、面接で緊張しすぎずにいれ

たかなと思います。また、その場で初めて聞く質問に答えるということもクエストカップなどでしていたので、それは面接の際予想していなかった質問に即座に答えられることに役立ったと思います。

面接試験のときに最近読んだ本について聞かれ、論文を書くときに読んだ本と探究型読書のときに読んだ本のことを話すことができた。

志望理由書を書く際に、言語技術で教わった事を使って自分の気持ちを明確かつ端的にまとめることが出来た。

面接をした際に、自分の思いや意見などを発することができたので、そこの部分は役立っていると思います。

探究の授業の中で副リーダーを努めたことを大学受験の面接でアピールすることができました。

私は公募推薦の方式で受験をし、面接があった。その際、探究の時間に様々な人の前に立って発表をしたことで、初対面の面接官の前でも、物怖じせずに、自分の経歴や将来について話すことができた。

探究の授業では、沢山発表があったおかげで、面接式の入試で緊張せずに話すことが出来ました。また、国際学部国際学科でしたから、SDG s の知識が面接時に活かすことが出来ました。

面接で気になっているニュースを聞かれたときに、探究で考えてきた社会問題について答えることができた。

論文で自分の将来に近いものを課題にすることで理解が深まる。

総合型選抜の面接の時にSDG s の話をした際に二年生で行ったソーシャルチェンジの話をした。探究はSDG s に関連したことを行うことが多かった気がするし社会問題について触れる機会があるから出願するための課題や面接などで役立つと思う。

私の入試方法は書類審査と面接でした。志望理由書を書く時に、探究で行った言語技術や「ロンリのちから」が活かせたと思います。また面接では、言葉をしっかりと組み立てながら話すことができました。

総合型選抜の面接の際に、探究で学んだ言語技術が役に立ち合格した。

総合型の面接では、今までやってきた言語技術や論文の内容が自分の志望理由にも繋がったし、プレゼンなどをたくさんやってきたおかげで落ち着いて面接に臨むことができた。

私は総合型選抜ですごく役立ちました。総合型選抜は高校生で頑張ったことなどを問われるので、何もしていないとなると総合型選抜は厳しいと思います。私の場合クエストカップで賞を取ったので大きなアピールポイントになりました。真面目に取り組んで良かったと思います。

総合型の小論文で、新聞の記事を要約する課題で役立った。論文執筆の際に資料集めを沢山したことがあり、その経験が総合型選抜の対策につながった。

公募推薦型：スライド（パワーポイント）の作成や論文の作成が自分の強みとなり自己アピールにつながる。探究の授業では発表の機会が多くあるため、人前で話すのに慣れるいい機会になる。また、SDG s 関連や論文執筆はテーマを自由に選べるため自分の進路に結びつけたものを書くことができ、自己アピールの際に使用することができる。

グループディスカッションが面接に役立った。

公募推薦で小論文を書くときに論理的に文を書く点で役に立った。

SDG s についての小論文や面接が多くなってきているためとても役立つと思う。思考力や主体的かつ客観的に考える力が身についた。

論文執筆であったり自分でテーマを決めて行う作業では、自分の学びたい分野に関連づけていたため、自分の中にいくつかの知識を用意できていたことが、面接に役立ちました。

総合型選抜の面接で探究の授業でどんなことをしたのか質問され、授業を通して学んだことについて答えることができた。

総合型選抜の面接試験でのアピールポイントが増える、過度に緊張しなくなる

この探究で学んだ事が、生徒の未来に役立つことができたら、こんなに喜ばしいことはない。

### 5-3 今後の展望

ようやく3年間のプログラムを実施し終えたが、W I Qはまだ完成したわけではない。今後も、生徒や共に取り組んでくれる教員、外部の協力者等全員で改良していく長い道程が待っている。まさに正解がないからこそ、より良いプログラムを「探究」していくよりほかないのである。教員に対するアンケートでは、「『答えを与えてもらう』から『自分たちで見つける』という意識が浸透してきたことに探究活動の意義を感じる。」「生徒ひとりひとりの主体性が少しずつ成長していったように感じられる。」など、肯定的な意見をたくさんいただいた一方、「プログラムを厳選して時間的なゆとりを作り、振り返りや発表の時間がもっととれるとよい。」という指摘もあったので、今後の課題としたい。

伝統校として残すべきものは残しつつ、時代の要請に適った新しい教育を創造していくためには、多くの労力が必要であることは言うまでもない。だが、これこそ「古くからの価値観やアイデンティティーを大切にしつつ、新しい知識や技能を積極的に取り入れる」という本校の校是、和魂洋才の精神に結びつくものである。生徒達と共に我々も成長を止めない。そして、本校の目指す「凜とした女性の育成」に、この探究授業W I Qが貢献できることを願って、今後も研鑽を積んでいくこととする。

### 【参考文献】

『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』ダン・ロスティン、ルース・サントナ著 吉田新一郎訳

『探究型読書』編集工学研究所





